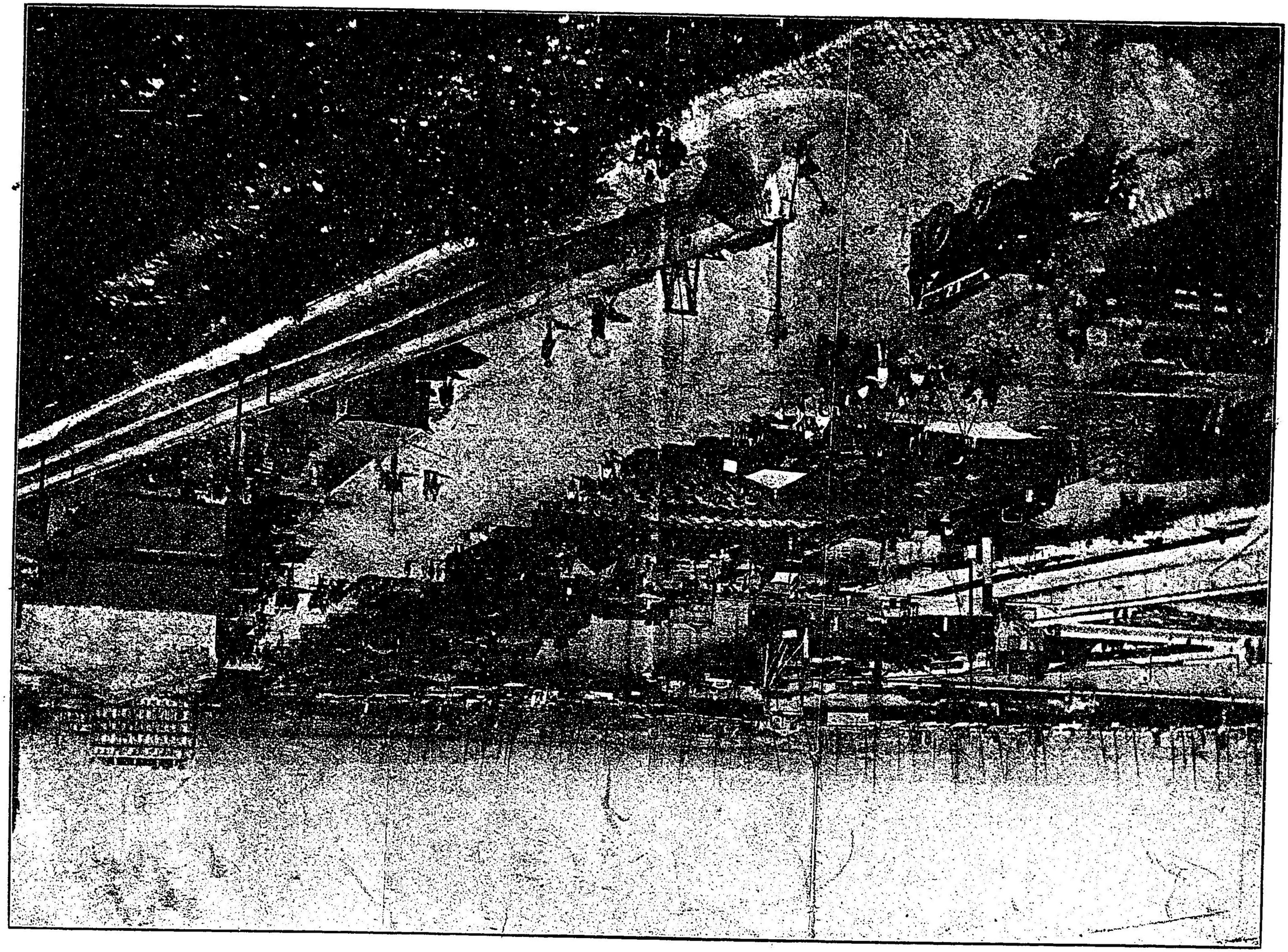
阪本喜久吉君肖像



日本叢書　第三冊　歐洲再航錄目次

○第一信

○海運の擴張に就て……一

○歐洲航路……二十二

○米國航路……二十二

○濠洲航路……二十二

○第二信

○橫濱の出船……四十九

○第三信

○亞丁の景（七國の市民）……六十

目一

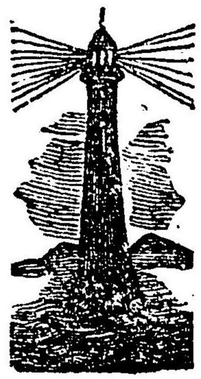
目錄

○紅海の景（古代の遺跡）……七十二
○蘇士市街の光景（埃及の末路）……七十八
○蘇士運河の景……百七
○蘇士運河の沿革……（其一）……百十五
○仝……（其二）……百二十
○運河會社の資本金……百二十九
○ポートセッド所觀……百三十八
○ナイル河口の古跡を望んで英雄の
末路と吊ふ……百五十
○マルセーユ港景並其海運業……百五十

目錄

○佛國劇場に遊んで芝居を見る……百七十三
○道德の廢頽及宗教の腐敗……百七十六
○佛國婦子の行狀を論じて我姉妹に檄す……百八十三
○第四信
○地中海感慨……二百十一
○ヂブラルタルの景……二百十九
○「トラファルガル」岬を望て稀世の
海傑子ソルを憶ふ……二百二十六

目次終



歐洲再航錄

阪本喜久吉

第一信

○海運の擴張に就て

貿易の機關と航路の擴張とを以て自任せる日本郵船株式會社か本年三月十五日國民の譽望に副ひ奮つて開航の式を擧げたる歐洲航路の運命も豫期の胸算空しからず、前途幾多の望を添へて今や六艘の滊船は鯨濤と蹶つて西に航そ、地中海上波濤浩渺として旭旗高く飜るの邊傲然として歐洲人士の膽を奪ふ天下の快絶何者か之れに加かん、余や最き に其先魁船たる土佐丸に搭し天涯万里遠く英京の月を眺めしが、本年七月皈朝そるや再び其第一新造船請取の爲め八十有五名の回航員と共に重ねて渡英することゝなり復た纜を神戸に解く、今ま見聞の大要を錄

して之を報道すると共に海運業に關する平生の所懷を陳し更に青年諸君の一顧を煩はさんと欲す、愚見若し海事思想啓發の上に於て多少の稗益とる處あらば望外の仕合なり。

由來稱す、海運は一國の要素にして其興廢消長は國家の盛衰と左右すと、然り、國權の伸張人民の福祉繫がつて一に斯業の隆替に存するは世界万國の歷史が繰返を所古來一として此道理を踐まざるはなし、見よ夫の歐洲の南端に位する葡萄牙は彈丸黑子の一小國を以て夙に地中海の貿易を獨占し遠く印度に航路を開きて第十五世紀の始め既に海上の覇權を握りたるにあらずや、而して其背を合とる西班牙は如何、貞淑なる皇妃イサベラの海事に熱心なる彼の亞米利加大陸の發見となり威權赫々新大陸の盟主と仰がれたるに非ずや、其他荷蘭の如き一時は七万噸以上の船舶と有し宇內に跋扈し、或は瑞典諾威の如き區々たる

半島國を以て依然大陸の間に介立し其獨立と唱ふるに非ずや、或は又英國の如き渺乎たる海中の一孤嶋と以て而かも其國威天下に風靡し版圖六大州に跨りて商略上兵略上共に宇內の第一位を占するに非ずや、是れ一として海權と恢擴し航權を伸張そるの結果に因らざるなきを得んや、又た夫の蘭と云ひ西と云ひ葡と云ひ曾て天下を睥睨せし勢も盈つれば缺くる世の習憐れ積年の國威衰運に傾き史上只其殘影を留むるに至りしは、抑も亦た既往に得たる航權と失ひしに基因せずんばあらず、殷鑑遠きに非らず、我が日本帝國民たるもの豈に夫れ遠く宇內の大勢に鑑み、近く方今の實況に照らして大に顧る所なくして可ならんや。

且夫れ海運業の消長は主として地理上の形勢に伴ふこと多し、見ずや小亞細亞亞豆大の土と以て能く富強と歐亞の間に唱へたるフイニシアの

如き或は羅馬の大帝國を震動し一時雄を海上に爭ひたるカーセーヂの如き、或は波斯百万の大軍を挫き之を西に進ましめざりしアゼンの如き、孰れも海岸凸凹屈曲天賦の地形良好を得たるより早く海運の勃興と見たり、更に方今の海上王英國を見るに其本國は四面環海の礁島にして波濤岸を嚙て白浪掀天し天與の地形最も海運の隆盛に適す、例令ひ豪膽斗の如きノルマン人の勇氣なしと雖も、天與五千五百餘里の海岸線は終に英國をして世界無比の海商國たらしめずんば已まず、況んや由來英人は世界を以て家となし海岸を以て席となすに於てをや、顧て帝國の地勢と察すれば眞に是れ東洋一部の大英國大小幾多の島嶼は南北に延て海岸の延長八千四百三十一哩實に世界廣しと雖も其海國たる天分と地勢とに於て誰か我國に若くものあらんや觀よ西北一体は一葦帶水を隔て支那朝鮮浦鹽に對し、東は煙波汪洋として太平洋を隔て遙に北米大陸に向ひ、南は比律賓新西蘭等点々相接して、南溟の天に連り、西は印度洋地中海を隔てゝ歐洲に通ず、若夫れ他日南北亞米利加を橫斷する尼加拉瓦運河或は亞細亞の北部を一貫する西伯利亞鐵道の全通するに到らば我國の形勢は一變して世界海運の中心に飛躍し局面益多端を加へて東洋は列國競爭の焼点となり政治的貿易的一大活劇場たらんこと夙に識者の先見する處にあらずや、是れ今日に當り豫め海運事業を以て國家的事業となし保護奬勵善く天賦の地形を利用し弘く世界の航路を擴張せざるべからざる所以なり、若し夫れ一部一局の利害に拘泥し國是を誤まらば終に宇内の大勢に制せられて東洋形勝の地歩も他國の爲めに蹂躙せられんこと極めて覩易の道理たり。

海運の擴張に就て

今や征清の一擧によりて國威頓に輝きて國光八紘に揚り絶東の島國は一變して東洋の海國となり東洋の海國は一躍して世界の强國となれり

此名譽ある戰勝の光榮と荷ひ万邦環視の中に立て益々其獨立尊榮を增進せんと欲せば須らく三大洋上の航權と握るべし、之れと握らんと欲せば大に海運と興し船舶を造り海員と養ひ航路と擴め益保護政策の方向と一定して朝野一心となり官民一体となり進取的海圖を盡せざるべからず、海運興りて國家の富强期すべく海運發達して貿易振起し海運隆へて殖民實行すべく海運昌へて外交見るべく海運興りて工業興起し其他郵便に軍備に始て完備充實するを得べし

抑も我が帝國日本は海國の要素に於て世界万邦比儔なき形勝を占め實に未來海上の盟主たるの運命を有す、故に之と發揮すれば海國の泰斗となりて世界の航權を握る敢て難きに非ず、何と以て然か謂ふ、曰く第一港灣の多き事、第二石炭に富む事、第三勞働賃金の低廉なる事以上三件は海國の要素に於て必要欲くべからざるもの而して帝國獨り之

を完有せ、誰か其未來の運命を疑ふものぞ

第一港灣、觀よ全國分て八十有五ヶ國、其內海に面せざる邦は僅かに十四ヶ國にして其他は全國沿岸到る所として良港灣に富まざるなく、卽ち九州には門司、博多、長崎、伊万里、唐津、三角、坊の津、山川、鹿兒島、臼杵等あり、四國には德島、高松、丸龜、多度津、浦戸等あり、本州には馬關、三田尻、牛窓、尾の道、鞆津、室津、兵庫、神戸大阪、鳥羽、四日市、津、半田、浦賀、淸水、品川、舘山、銚子、荻の濱、野蒜、石の卷、八の戸、青森、土崎、酒田、船川、新潟、直江津、魚津、伏木、七尾、阪井、敦賀、小濱、由良、宮津、賀露、米子松江、境、杵築、濱田等あり、北海道には箱舘、江刺、岩內、小樽、宗谷、根室、厚岸、釧路等あり其他軍港としては橫須賀、吳、佐世保舞鶴、室蘭の五港あり、何れも港內水深く、波平に大船巨舶容易に出

入するを得べし、是れ其要素に富む所以の第一なり

第二石炭　全國通じて氣候温和地味豐饒大に物産に富む、就中石炭産額の多量なる既往の事實之を証して餘あり今明治二十三年より全廿七年に至る五ヶ年間の統計を左に擧げん

廿七年	四〇〇〇〇〇	一七〇一一三〇
廿六年	三三一七一八八	一五〇五四一三
廿五年	三一七五六七〇	一二九九三五二
廿四年	三一七五八四四	一二三九八二一
廿三年	二六〇八二八四	一二一四五七二

依之觀之其産出高の増加をるると共に近來著しく輸出の進歩と來たし暖々乎として其盛況を呈せるは是れ即ち内に充實して外に溢るの好証に非らずや、既に現時香港新嘉坡に於ては英國炭を驅逐し本邦炭獨り市場の需用と増さんとす畢竟るに是れ價格の低廉なるか故なり價格の低廉なるは船舶の運轉に至大の勢援を與ふ是れ航海場裡に勝を制するの一手段なり、是れ其要素に富む所以の第二也。

第三勞力　我國勞力者の賃金が世界に於て最も低廉なるは夙に世人の承認する所更に余輩の説明と俟たず、然れ共今之を紐育エコノミストに依り歐米各國の勞働者一週間に對する賃金を比較するに左の如し

勞働者一週間賃金表

國名	官	工	鍛冶
日本	左官 弗二、三八	大工 弗一、八三	鍛冶 弗一、四六
支那	一、六〇	二、一五	一、二五
北米	二一、〇〇	一五、二五	一六、〇〇
和蘭	四、八〇	四、八〇	四、八〇

海運の擴張に就て

伊露國	三、〇〇	四、〇〇	二、六〇
丁抹國	六、七三	三、三〇	三、七二
英國	五、三六	四、〇四	五、三八
佛國	七、六八	七、六六	七、三七
獨逸	七、二〇	八、〇〇	六、〇〇
白耳義	四、六五	四、一一	四、〇〇
瑞典	五、二三	四、〇四	五、三八
西班牙	五、二七	四、七四	五、二〇
	三、三〇	三、九〇	三、九〇

以上の表によれば世界に於て勞力賃金の最も不廉なるは米國にして我國の賃金を標準として換算する時は其比例に於て八倍乃至十九倍となる其他英佛の如き何れも皆三倍以上ならざるはなし、故に今長崎横須賀等に於ける實際の職工賃金を三十五錢乃至四十錢と見做し英國の職工賃金三志卽ち一圓四十五錢に比すれば其差果して如何、元來造船の費用は材料と勞力との割合に於て六と四の比例を保つにより今七十万圓の滊船と製造せんと欲せば二十八万圓を其職工賃金に支拂はさるべからず卽ち英國に於て廿八万圓を要するものとすれば我國にては其四分の一卽ち七万圓を以て足りとす其他下等海員の如き我には一人一ケ月六圓乃至十七圓を拂ふも彼は三十五圓乃至四十五圓を支拂はざるべからざるに非ずや、是れ勝算の歷々たる所以にして卽ち其要素に富む所以の第三なりとす。

海運場裡最后の勝利者は堅牢宏大の滊船と廉價に製造運轉なさしむるにありとす、顧て帝國造船業の實況に及べば轉た痛嘆に堪へざるものあり、何ぞや曰く輓近小形滊船の製造は大に其武歩を進め工事の速な

一 海運の擴張に就て

る代價の廉なる遠く歐米の市場を壓倒するに足るものありと雖も恨むらくば之が原料たる瀝機瀝鐵錨鎖の如き總て其供給を外國に仰ぎ隨て未だ大船の製造を見るに至らざるは海運上目下の一大欠点にあらずや是れ造船の奬勵が刻下の急務にして海運の擴張と相待さるべからざる所以なりとそ、聞く今回三菱造船所は三十万圓の損失を顧みず斯業の爲め奮て郵船會社の注文に應じ五千八百噸の大船製造に着手せりと、洵に斯業の一美談といふべし、若し夫れ他日分業行はれ技術の發達するに於ては是等快速堅利の新式大瀝船續々出來せんこと瞭々明なりと雖も徒らに現狀に安んじ姑息の策を講ずるは識者の取らざる所世の造船業者たるもの顧る所なくして可ならんや

夫れ帝國が海運の前途に於て万國無比の實勢を有するは前節已に述べたるが如し、然れども崑山の美玉も磨かざれば光なけん、如何に天與

の形勢も之に人工を加へ賃金の低廉も之を利導するに非ざれば何の効益かあらん、若夫れ帝國をして超然東海に孤懸し鎖港屏息世界と交通せずんば則止む苟も宇内万邦と對峙し威勢堂々鹿と中原に爭はんと欲せば須く列國海運の實蹟に徴し勇往猛進滿腔の精神を注で斯業の隆興を期すると共に全力を奮て是等要素の發達と企圖せざるべからず。

由來稱す文明海軍の任務は商業を保護するにありと、然り軍艦は平和の戰場即ち商界に驅馳して商船を護らざるべからず、古來各國の海上に雄飛して商權を握りし所以の道又た之れに外ならず我國素と四面環海の島國隣邦の關係総て海上に賴り邦家の安危一に國防の如何に存す故に兵略上にありては海軍を隆にし沿岸と防備し商略上にありては海運を興し貿易の利を收めざるべからず、見よ夫の露佛が軍事鐵道と重し舉國奮て其擴張に從事そるは境上連絡旦に開戰を布告し夕に大軍境

に臨むが故にあらずや、英國が今日ある所以のものはエドワード第四
世の遺略を繼いで終始一定海國の國是を取りしが故にあらずや、故に
帝國をして世界の日本たらしめ廣く宇内に雄飛して海國の實を擧げん
と欲せば須く天下の大勢に鑑み歐州先進國の實蹟に照らし海軍の擴張
と海運の振興を以て國家百年の國是となさゞるべからず、今や官民唱
和して海軍の擴張を講ずるに當り首と回らして一昨廿七年日清戰爭の
當時に溯れば我海軍力は排水量僅かに六万九千百二十噸に過ざりき、
然れ共威海衛の一戰北洋水師亡て其殘艦を領し一躍して八万千二百四
十噸となれり、是れに今后二ヶ年内に竣功すべき分を合算する時は十
二万噸に及ぶべきなり、然れ共夫の英佛米獨露五ヶ國の聯合艦隊は目
下十八万八千噸を有するものあり、今是等の各國が咸く同盟せんこと
は聊か杞人の憂に近しと雖も既に三國同盟が强行したる遼東還附の事

業を破壞する能はざりしと思へば帝國が未來東洋の天地に濶歩し三太
洋の航權を握るに至るは少くとも十六万噸内外の海軍力を養成したる
曉と知るべし且夫れ東洋近時の風雲は日一日に逼迫を告げ禍根近く胚
胎して光鋒己に相觸れ再び擧國の人士をして劍戟相見もるに至らしむ
るは必然の理なり觀ずや遼東の還附は千載の遺憾を留め半島問題未だ
終局を告ずして西伯利亞鐵道は將に全通せんとし（露政府は夜間電燈
を用て工事を急ぎ今より三年の内に竣功の見込なり）或は露清の境叨
に兵器彈藥を徵集するが如き、或は又た膠州灣旅順港を借入れし風聞
の如き、一として我國外交上の問題に關せざるはなし、東洋目下の形
勢繫がつて危機一髪の間に存そといふ誰か又疑を容れんや、よしんば
一歩を讓り幸に列國攻守同盟の均勢に由て以て東洋十年の平和を維持
するものとするも已に海軍海運を以て我國の二大國是となさゞる以上は之

海運の擴張に就て

を外にして對外貿易の爲めの爲めに之を內にしては國內沿岸防備のため益海圖を畫し國家百年の隆盛を期せざるべからず、況んや東洋今日の實況に照らし今后十年の平和は到底得て望むべからざるに於てをや、强大なる海軍隆盛なる海運は帝國の生存上一日も之を欠くべからざるものにして之が一盛一衰は實に邦家の安危浮沈に關そること前節已に述べたるが如し故に海運の如き宜しく國家的觀念を以て擧國の人民之を奬賛し政府亦大に保護誘掖して之が擴張を奬めざる可らず、且夫れ貿易は國旗に伴ふ各國海軍力及海運力の消息は國家の盛衰と示し併て對外貿易の消長と知るに足るべきを以て今世界に於ける海軍力の位置を比較せん

第一　英國　第二　佛國　第三　露國　第四　伊國
第五　獨逸　第六　米國　第七　澳國　第八　西班牙

第九　土耳古　第十　和蘭　第十一　日本　第十二　抹
第十三　瑞典　第十四　智利　第十五　西然丁　第十六　伯剌亞
第十七　希臘　第十八　葡萄牙　第十九　支那　第二十　諾威

依之觀之我國は世界の海軍力に於て第十一位を占む而して爾今三ヶ年の內卽ち明治三十二年に至れば和蘭を凌駕して第十位に昇るべきも未だ歐洲の小國たる西班牙土耳古和蘭の如き老朽殘衰の諸國に及ばざるにあらずや、我國海軍の前途頗ゝ遼遠なりといふべし、更に飜て世界に於ける海運力を比較せんに

第一　英國　第二　合衆國　第三　獨逸　第四　諾威
第五　佛國　第六　伊太利　第七　西班牙　第八　瑞典
第九　露國　第十　和蘭　第十一　希臘　第十二　抹
第十三　澳國　第十四　土耳古　第十五　伯西爾　第十六　日本

海運の擴張に就て

第十七 白耳義　第十八 智利　第十九 葡萄牙　第二十 西然丁
第廿一 支那　第廿二 布哇　第廿三 埃及　第廿四 烏爾亞
第廿五 秘露　第廿六 墨西哥

如斯我海運力は南米の巴西智利の半開國と相伯仲して其西班牙土耳古に及ばざる事は依然たり、我國海運の奮はざる寧ろ怪むに足らんや、目下世界に於ける百噸以上の船舶は其數三万〇三百六十八艘にして此噸數二千五百十万七千六百三十二噸なり、而して英國は全噸數の百分の五十米國は百分の八半獨乙は百分の七半諸威は百分の六半佛國は百分の四にして我國は實に百分一强を有するに過ぎず語を換ゆれば即ち英國の四十分の一にだも及ばざる也、吾人は此實況に對し果して何等の感慨かある

以上叙するが如く我海運は既往に於て旭日登天の勢と呈せしが、恨む

らくは寛永の鎖國令が海運の進歩を犧牲に供して一頓挫を與へたりと云へども今や復興の時機至りて俄然其海運力を膨脹し西に大坂商船會社、東に日本郵船會社両々相對して內外の航路を擴張し、其他東洋汽船會社の如き、帝國商船株式會社の如き有爲の汽船會社續々勃興して航海の前途轉多望を極むるに到れり

抑我海運力が如何にして斯迄膨脹せしやを究むるに疑もなく日清戰爭の結果にして卽ち去る廿七年五月末我國汽船の總噸數は十八万千八百十九噸なりしが廿九年一月末の調査に依れば俄かに三十三万二千二百五十三噸に增加したり、尙之に新造計畫中なる郵船會社の汽船十八艘此噸數九万六千噸及東洋汽船會社の新造船六隻此噸數三万四千九百二十噸其他大坂商船會社の分と合算するときは無慮四十八万噸乃至五十万噸に達そべし、僅々三ヶ年の短日月を以て十八万噸より一躍五十万

海運の擴張に就て

頃に上る、世界海運史上洵に稀有の發達なりと謂ふ誰か亦疑を容れんや

且夫れ日本郵船會社に百尺竿頭一歩を進め從來の資本金八百八拾萬圓に更に千參百貳拾萬圓を增募一都合貳千貳百萬圓となし、奮躍一番茲に多年の素志たる歐米濠の三大定期航路を開始せり、於是乎我國汽船は宇內の海洋に貫航し西は南亞細亞より地中海を經て龍動に到り北は東露の一帶東は米國太平洋岸に沿ひ南は濠洲に及び天涯到る所日章旗の飜るを觀る誰か亦快ならずと言はんや、而該社今后の方針は帝國未來の海運に直接の關係あるを以て本年六月十日臨時株主總會の席上に於て現任社長近藤氏が述べたる三大航路に關する意見の一部を摘敘せんに當會社は國家の公益上海外航路の擴張を必要なりとし夙に計畫企圖する所の航路一にして足らず、今其主要なるものを擧ぐれば歐洲濠

洲に達するもの各一航路、米國に達するもの三航路及南亞米利加巴西國を經て北亞米利加合衆國紐育港に達する航路等是れなり、而之に用もる船舶は各航路の狀況に從ひ其種類を異にし何れも斬新快利なる大形の汽船ならざるべからず、隨て其造船の資金而已にても無慮四千萬圓の巨額に上るべし、是を以て此の目的を一時に達せんとするには固より容易の業にあらず、須く序を追ひ機に應じ他日の大成を期せざるべからず、乃此目的を達するの一着手として既に開始せる歐洲航路の運送力を倍數に擴張し、又米國三航路の內最急務とする一航路及濠洲航路を開始し漸次其武歩を進めんと欲す、蓋國運の振張に應じ中外運輸交通の機關たる當會社の任務として執るべき至當の順序なりと信ず、依て茲に右新事業に充つべき資金を增加するの必要を認め本議を提出する所以なり其用途の大要左の如し

海運の擴張に就て

歐洲航路

此航路は漸次完全なる郵便線路となその計畫なるも先づ其前驅として旅客貨物兼用の滊船六隻を以て毎月一回定期航海をなさしむるものとなし、其船舶は曩に新造に着手し落成に到る迄姑く在來の船舶及雇船と以て之と開始せり、然るに實際の狀況に於て到底今日の規摸に安ずると能はざるものあるに依り更に六艘と新造し都合十二艘を以て毎二周間一回の定期航海に進めんと欲す、而して其船舶は大凡總噸數五千八百噸最強速力十四海哩船價一艘に付き平均英貨八萬磅其換算壹圓に付二志二片二分の一の割にて金七拾貳萬四千五百貳拾八圓此十二艘分八百六拾九萬四千參百參拾六圓を要す

米國航路

此航路は北亞米利加大陸を横斷する諸鐵道と連絡して東西球の大貫線

なるが故に豫定航路の內少くも一航路は旅客の運漕を專とする速力搆造共に巡洋艦に代用すべき最優等の大船ならざるべからず然れども今第一着に開始せんとする航路は旅客貨物兼用の船舶と用もるものなし凡總噸數四千五百噸最強速力十四海哩のもの三艘を新造し外に在來の船舶を加へ都合六艘を以て毎月二回米國と香港の間に日本を經て定期航海せしめんとするにあり、其新造すべき船價一艘に付平均英貨六萬貳千磅此換算二志二片二分の一の割にて金五拾六萬千五百九圓此三艘分金百六拾八萬四千五百貳拾七圓を要す

濠洲航路

此航路の目的は旅客貨物雙ながら之を占むるにあり、從つて其船舶も亦之に應じて旅客貨物兼用に適するものならざるべからず、乃其程度は大抵現在支那濠洲の間に航行する滊船に數等優るべきものとなし、

凡總噸數三千噸最強速力十五海里のもの三艘を新造し外に在來の船舶三艘を加へ都合六艘を以て毎月二回本邦と濠洲間に定期航海なさしめんと欲そ、其新造すべき船價一隻に付き英貨五萬五千磅此換算金壹圓に付二志二片二分の一の割にて金四拾九萬八千百拾參圓此三艘分金百四拾九萬四千參拾九圓を要そ

抑も我國の海運事業は建國の初めより爾來三千年間綿々として其歷史を有そ、今之が沿革を叙せんは事頗る浩瀚に渉るを以て單に其顯著なる事實の五六と擧げんとす、蓋し建國以來斯業の經歷を察するに一盛一衰幾多の浮沈ありたりと雖も要するに歷代の帝王一として之れが必要を認めざるはなく夫の素盞嗚尊が遠く滄溟を冒して朝鮮に渡りたるが如き、或は崇神の朝沿海諸國に令して船舶を造らしめたるが如き、或は神后の三韓征伐の如き、或は阿部比羅夫が二百艘の舟師を率ひ黒

龍沿岸四百餘里の地を掠めたるが如き、或は平相國清盛が兵庫港を修築して宋の貿易を興したるが如き、或は足利氏の末葉幾百の八幡船が楊子江一帶の沿岸より山東省の海岸扨ては盛京灣の內外に跋扈したるが如き、或は弘安四年北條時宗が十万の兵艦と殄滅して大に對外の思想を啓發したるが如き、或は天正十年大友宗麟の使節が一葉の風帆船に駕し印度洋より喜望峯に航し亞非利加の海岸に沿ふてリスボン府に出で更にマドリットより地中海を經て羅馬に達したるが如き、正に是れ天然の地勢に阻隔せられたる東西の兩洋も此時を以て始て邦人の航通を見るに至れり、其後二年蒲生氏郷が四度使臣を羅馬に送りたるが如き、或は慶長十八年伊達政宗が其臣支倉常右衛門をして太西洋を横ぎり「ボール」第四世に謁せしめたるが如き、夫の人口に膾炙する『幾度蹈危機志未窮、欲征蕃國作奇功、圖南鵬翼何時奮、久持扶搖万里風』と

詠せしが如きは政宗の眼光夙に海外に徹して能く圖南の抱負と洩すものに非ずや、或は又文錄年中秀吉が南海渡船の船舶に朱印の制を定め爾後二百艘の御朱印船舳艫相啣で海南二十餘ケ國に出入したるが如き其他家康が日黑間の遠洋航路と開始して全國を自由貿易港となし內外の商船浦賀下田等に輻湊したるが如き、一として海運の必要と認め之が隆興を企圖そるの策に出でざるはなし、

夫れ斯くの如く我海運は駸々乎として長足の進歩をなし常に東洋の航權を掌握して先制の位置を占め遠く暹羅、安南、東京、スマタラ、ジヤバ、ボルチ、呂宋、マレー半嶋、印度諸嶋及び比律賓群島に航して其商權を左右したり、見よ呂宋助左衛門、山田長政、天竺德兵衛等の如き其功業偉勳は千歲の下人をして蹶起せしむるに非ずや、然れ共悲むべきは外敎蔓延の結果天艸の一揆となり其波動は終に寬永十三年の海禁令となりて海上の航通を遮斷し、是に於て鎖港孤懸の形勢漸く成り歷代の將軍亦其主義を遵守して四海の交通全く止むに至る、嗚呼む可し幾多海傑の鴻圖偉略も江戶城一篇の法令に葬られ我海運史上一大欠点を存そるに至れり。

抑も幕府が外敎の跋扈を防遏せんが爲に之を嚴禁せるは頗る善しと雖も之れか政策をは積極に取らずして消極に取り一朝自ら屈して海外渡航の自由を停止し之と同時に大船巨舶の製造を禁遏し洎々たる海運の大勢を阻格するに至りては實に德川政府の一大失計といはざるべからず、想ふて茲に到る誰か我航運界の爲め悲まさらんや、然れ共宇內の大勢列國の交涉は永く幕府の鎖國政略を許さず文化已降外船頻りに我海に出沒し各國の使臣交々來て通商を請ふや、擧國恟々として物情騷然たりしが果せる哉、嘉永六年米國の艦隊が万國に卒先して江戶灣

に突入するや、開國の氣運一轉し、終に安政元年を以て英米魯の三〇と假條約を締結し、次で和蘭佛蘭西西班牙伊太利等の諸〇と修交を訂ー外船渡航の自由を見るに至れり。

如斯浦賀灣頭の艦影は霹靂一聲鎖〇の夢を破りて漸く外〇との航通を開きしと雖へども、顧れば寛永の海禁令より茲に到る實に二百二十有餘年桃源洞裡の夢暖かに上下擧て文弱に流れ惰眠を貪り海傑の遺蹟亡で海事的觀念去り六十餘州の生民又一人として首を海上の經營に回らものなきが遺憾る。

於是外人等は競ふて我沿岸の航權を握らんと欲し孜々其計畫に怠るなく、夫の太平洋渠船會社は明治十三年を以て突然桑港より横濱神戸長崎に到るの航路を開始し窃に我内海の回漕業を壟斷せんとせしを、我海南土陽の偉人岩崎彌太郎氏赤手奮て九十九商會を設け明治四年を以

て其業を興し、後三菱社と改稱するに及び益政府の保護信用を得内地の各港に定期の航海を開き、次で其模範を擴張して横濱神戸上海の外國航路に及ぼし、社運益隆盛と極め沿岸の航權漸く其掌中に歸するを得たり、而して明治九年ピーオー會社と角逐して一擧彼と制し再び共同運輸會社の興るに及び激烈なる競爭の末終に両社合併して今の日本郵船會社を創立せ時に明治十八年十月一日なりとす、當時同社の船舶は合計七十六艘此噸數三万九千八百七十噸なりしも而も其過半は老朽小形の古船に屬し實際運輸に差支なきものは大略四十艘内外に過ざりき、而して又た定期外航船の如きも横濱上海長崎浦汐の三線に止り隨て社運甚た盛大ならざりしが爾來同社は鋭意熱心外國航路擴張の方針を執り今日に在ては滊船五十七艘此噸數十万千三百四十二噸を有し外國航路も大に延長して横濱上海横濱孟買神戸浦汐香港浦汐神戸天津

神戸牛莊神戸馬尼剌の七線となり次で今回一英斷と以て歐米濠の三大航路を開始せり

以上新船築造に要する資金壹千百八拾七萬參千貳百貳圓とそ、此外に造船設計上臨時變更の場合及爲替相場の變動幷に回航費等に充つる爲め豫備として金百參拾貳萬六千七百九拾八圓を備へ置くを要す、但此種の費額は實際に臨み自然餘金と生ずる場合には臨時其他の新船と築造するの資金に供用することあるべし云々

依之觀之郵船會社は從來六艘なりし歐洲航路の濠船と爾今十二艘となし、毎月一回の定期を毎周二回に進め更に濠洲航路に充つる爲め四千五百噸の濠船三艘、濠洲航路に充つる爲め三千噸の濠船三艘及豫て又た歐洲航海用として注文せる六艘の外尚五千八百噸の濠船六艘都合十八隻と新造し海外各地に支店を設置すると同時に益其職務を擴張して

中原鹿を逐はんとするの好擧に出づ、余輩は獨り該社の爲め而已ならず實に帝國航業の爲め其前途の幸運と祈るものなり。

夫れ歷史上よりするも地勢上よりするも帝國が未來世界に雄飛して三大洋上の航權を握るに到るは余輩之と知る然れども今や是を已往の實迹に徵し現在の實況に鑑み更に宇內の大勢に照らす時は、我國海運の前途仍悠遠なりと謂はざるべからず、即我海運力は世界に於て漸く第十六番目の低位と保つに過ぎず而方今航路內に屈して外に伸びざるの結果航權彼に委そるを以て輸出入貨物の如き十中九分九厘迄常に外船の左右する所となるにあらずや、試に既往十ケ年間本邦の貿易額と舉げんに。

明治十九年	八六、五〇七、六六〇圓	全廿四年	一四二、四五四、五四〇圓
全廿年	一〇四、一〇七、四五一	全廿五年	一六二、四二八、八四二

仝廿一年　一三一、一六〇、七四四
仝廿二年　一三六、一六四、四七三
仝廿三年　一三八、三三二、〇八六
仝廿八年　二一五、三七二、五七一

如斯我貿易額は駸々乎として日進月歩の趨勢を呈するにも拘はらず之が機關たる海運力相伴ふ能はざるは洵に痛嘆の至ならずや、則前記十ケ年間我國の各港に出入したる船舶の數を見るに艘數にありては外國船八割一歩八厘内國船一割二歩二厘搭載物の價格に於ては外船百分の九十一内船百分の九噸數に在ては外國船に八割一歩四厘内船一割八歩二厘、而して更に運賃の割合を平均する時は外船百分の十七内船百分の十三を得たるに過ぎず、換言すれば年々參百萬圓乃至參百五拾萬圓の運賃は空しく外船の攫取する所となる、我海運が世界の舞臺に仲間入そるの資格なしといふ誰か是れを怪まんや。

然れ共今之を單に世界滊船會社の点より觀察する時は我日本郵船會社の如き實に世界稀有の大會社たるに負かず、目下同社が雇使そる海陸の人員を擧ぐれば左の如し、

明治廿八年九月三十日現在使用人員數

職名	陸員 外人	陸員 内人	陸員 計	海員 外人	海員 内人	海員 計
監督長						
海務監督						
航海監督						
機關監督						
船舶運轉手						
機關長						
機關手						
支配人						
副支配						
助役						
技手						
船長						
機關長						
事務長						
運轉手						
機關員						
倉庫守						
船守						
雇						
計						

海運の擴張に就て

雇　一　三九　四〇
機關手監督助役　二　一　二
合　計　一二一　三五七　三七九

海陸通じて千百三十六人の社員を使用し弘く世界各國に渉りて其業を營むもの世界果して幾何かある、目下世界に於て最大滊船會社と稱すべきものは其數僅々十五六に過ぎず今之と左に摘擧せんに

世界最大滊船會社名表

社名	船籍	船數	噸數
彼阿會社	龍動	六〇	一三〇〇五八
キユナルド會社	里坂布留	二九	六七一一九
アルラン會社	グラスゴ	三二	六九〇五二
英領印度滊船會社	龍動	九六	一四〇〇五二
アンカー會社	同上	二八	五八八六五

ウイルソンチーソンリーエンド會社	同上	八七	一〇四五四〇
チセヤニツク會社	同上	二一	六二二六〇
ゼチラルトランスアトランチク會社	巴理	六六	七九二五
メツセザリーマリチーム會社	同上	六〇	一〇八七六三
北獨逸ロイド會社	武列面	七一	一三五〇七一
漢堡米國運漕會社	漢堡	五九	一二二六五三
ナビカシオゼチラルイタリヤナ會社	伊太利	九七	一〇四二〇三
墺國ロイド會社	墺國	七五	八四五〇三
太平洋郵便滊船會社	紐育	一六	三〇五九五
日本郵船會社	東京	五七	一〇一三四二
大坂商船會社	大坂	五三	二〇〇〇

別表によれば世界第一の滊船會社は英領印度會社にして第二は北獨逸

海運の擴張に就て

ロイド會社、第三彼阿會社なりとぞ、而して我日本郵船會社は伊佛兩郵船會社と伯仲の間に立つ、然れ共現時同社が陸軍省より依托されたる汽船十一艘此噸數三万四千五百八十噸及び新造中なる汽船十八艘九万六千噸と合算する時は船數に於て八十七艘噸數に於ては二十三万千八百六十噸に達し世界唯一の最大汽船會社たるに至るべきなり、帝國海運の前途豈に多望ならずや、而して前記諸會社の內重に東洋に航路を有するものを擧ぐれば

彼阿會社（龍動地中海諸港○亞丁○コロンボ○新嘉坡○香港○上海○神戸橫濱○）	二周	一回
ヤツスル會社（同　上）	同	上
グレン會社（同　上）	毎十日	一回
チーシヤン會社（龍動海峽殖民地○支那○日本）	月	一回
加奈他太平洋汽船會社（晩香坡○香港○橫濱）	月	一回

佛國郵船會社（馬耳塞野山港○ポルトセイド○亞丁○コロンボ○新嘉坡○柴棍○香港○上海○神戸○橫濱○）	二周	一回
北獨郵船會社（ブレメン地中海諸港○亞丁○コロンボ○新嘉坡○香港○上海○神戸○橫濱○長崎○）	四周	一回
太平洋郵船會社（桑港○香港○橫濱）	毎十日	一回
墺國ロイド會社（トリエスト○ポートセイド○亞丁○孟買○コロンボ○新嘉坡○香港○上海○神戸）	毎月	一回
伊國郵船會社（惹那亞○孟買○コロンボ○新嘉坡○香港○上海○神戸○橫濱）	同	上
北太平洋汽船鐵道會社（タコマ○ヴイクトリア○橫濱○神戸○長崎○上海○香港○）	十八日	一回

歐米各國　競ふて堅牢偉大の大船巨船を新造し東洋の航權を掌握せんとそる實況如斯、我帝國たるもの大に顧る所なくして可ならんや、而して是等諸會社が如何にして東洋の航權を擴めしやといふに何れも皆其本國政府が海運を以て國家的事業となし造船の奬勵に航海の保護に

其用意周到なるの結果に基せざるはなし、觀よ夫の彼阿曾社は補助金四拾參萬四千八百磅、獨逸ロイド會社は四百九馬克、伊國郵船會社は參百九拾貳萬八千貳百參拾貳リラ、佛國郵船會社は六百六拾七萬百貳拾五法、墺國ロイド會社は參百四拾萬フロレンと各本國の國庫に仰ぎ競ふて東洋の天地に濶歩するに非ずや、顧て日本郵船會社が今回發布の航海奬勵法案に依り臨時航路に於て國庫の支給を受くべき金額は假に新造船一隻平均五千七百八十九噸速力十節と見做せば一回往復拾參萬四千六百壹圓拾九錢なるを以て此十二回分即百六拾壹萬五千貳百拾四圓參拾六錢となる概算なり、之に米國航路大凡貳拾貳萬圓及濠洲航路一ヶ年拾九萬圓浦鹽コルサコフ航路一ヶ年六萬圓合計六拾萬圓の特別航路助成金を加へ更に從來の八拾八萬圓を合算するときは實に參百參拾壹萬九千貳百拾四圓參拾六錢の巨額に

達そべし、是に郵船會社が前途多望なると同時に世界唯一の滊船會社たる所以なり

夫れ如斯帝國の海運は一方より觀察すれば世界海國の領袖となり宇内て大に欵くる所あらずんばあらず、曰く港灣の浚渫、堤防の修築、船渠の增設　造船の奬勵、航路の標識・燈臺の設置、暴風の標望樓、水難救助海員の養成等は未以て充分なりと謂ふべからず、余は歐洲諸國の實況を日擊する毎に帝國現時の實況に顧み未だ曾て長大息せずんばあらず、就中海員の養成は急務中の最急務に屬そ

夫れ船舶は死物なり之を活動せしむるは海員なり海員の實に船舶の元動力なり、たとひ其構造如何に堅牢を極め其速力が如何に輕迅なるも運轉せしむる元動なくして如何に海運を擴め海圖を濶するを得んや、

海運の擴張は海員の養成と相待ち始て其實効を奏するものなり、況んや帝國今日の實況は大に海員の不足を感ずるに於てをや、何を以て之を謂ふ、觀よ明治廿七年末の我海員は船長千三百五十四人運轉手千六百五十七人機關手千七百五十五人にして之を前年來に比すれば其總員に於て內國人に八十二人外國人に六十一人都合百四十三人を增加したりと云へども、更に之と其海運が十八万噸より一躍して三十二万噸に增加したるに比すれば其差果して如何、現に日本郵船會社が船長として廿七人運轉手として八十二人機關手として百一人合計二百十人の外國人を使用しつゝあるを觀るも以て其全豹を窺ふに足らん乎、況んや今回改正の船舶職員法に依れば現航の船舶に對し一等機關手さら尚且全國に於て百六人の不足を見るに非らずや、其他下等海員の如き非常の不足を感ずるものと云ふべし、何となれば今我國の水火夫は全國を

通じて一万七千人乃至一万八千人と見れば大差なかるべし、而之を本年末の現在滊船五百二十七艘に制當つれば一艘平均三十四人强となる然れども現時我國の滊船は千噸以上のもの丈に增加せると以て一艘平均四十人乃至四十五人の水火夫と要せざるべからず、今假に四十人とすれば現今に於てすら尚且千三百六十二人の不足を見るにあらずや、況や目下新造中なる三十隻の滊船渡航するの曉に於てをや、是れ今日に當り丈に高等海員養成の必要あると同時に下等海員速成の急務なる所以なり

抑海員は平時に在りては貿易指導者たり、有事に在りては海軍の後援として彈丸血雨の間敢て軍人と軒輊なき世人夙に之を知る、然るに現今海員が微々として振はざると如斯、是果して如何所謂桃源洞裡の夢未だ醒めずと、余は以上の問題を究むに際り爰に三個の原因あるを見

る、第一世人が海事思想に乏しきより之を尊重するを知らず冷視酷遇そると、第二海員自ら未だ舟子的觀念を脫る能はずして往々其品位と損そと、第三國家が海員を保護誘掖そる点に於て未だ全く其義務を果さゞると以上は確かに海員不振の障壁たるを疑はず

觀よ我國中世の海運が旭日登天の隆勢を極めしは夙に開國進商の國是定り國民の海事思想一時に煥發したるか故にあらずや、觀よ風濤萬疊幾日の航海に忍ふの海員も一朝上陸の閒を得れば一度の豪遊に千金と擲ち美人の枕頭其情を節そる能はざるは今日に於て最も得意とする所非らずや、又た觀よ病傷海員を救ふの義會若くは其寡嫗たり孤兒たるを憐むの方法世界幾何かある、思ふて玆に到る海員不振の現狀何ぞ怪む、足らんや、抑歐米各國の海運、以て國家的事業となし、殊に其海員の待遇に至ては用意頗る周到なるものあり、上

は王室より下萬民に至る迄協心同力之を扶掖し之を敬慕し、即船長の職を以て名譽あるものとなし「キヤヤピテン」の稱號と以て最も尊重すべきものゝそ、故に或は年金を送りて其餘生を慰し、或は其航蹟を錄して后世に傳ふる等其人心を鼓舞、海員を保護する美談逸擧一々枚擧に遑あらず、蓋し彼等は常に雲煙渺々波濤生死の間に出入し其職を執るに行剛に氣勇なり且世界万國に航して弘く外人と交際し見聞高く度量濶く最も忠君愛國の思想に富む、其社會の敬愛を受くるは自然の理なり、然るに我邦人の海事思想に冷淡なる此名譽ある職業と卑み此尊ぶべき海員を蔑如す、嗚呼誰か海員の爲めに此雲霧と排して日月の光と期そるものぞ、たゞ十の商船學校一百の海員救濟會興るも此雲霧にして排除そるを得ずんば斯業の進歩到底得て期すべからず

今や政府は航海造船奬勵法及之に伴ふ諸法律を提出し議會の協賛を經

て救裁を仰ぎ已に夫々之を公布したり、而して東京商船學校亦從來の規則を改正し其摸規を擴張して譽望に負かざらんとす且夫れ近時少壯血氣の海員は何れも中等以上の教育を受け智見遠く歐米に渉りて志氣雄壯技術熟練せるもの少からず、自然淘汰の原理は今や天保時代舟子的海員を驅りて明治進取的少壯航海者を加へんとす、於是乎始て海員の面目を一新し其風儀を正し其品位を揚げ由て以て世人の尊重を博すると共に從來不振の障壁を打破するを得ん、少壯航海者の任務重且大なりと謂つべし、終に臨で語を寄す、鄉關の青年諸君、諸君一國の元動力未來帝國の相續人なれば切に輕擧事を誤るなく弘く世界の大勢に鑑み近く帝國の實況に徵し由て以て其進退を左右せられんことを記憶せよ十九世紀の世界は實利實益の世界なるを以て之に處せんと欲せば宜しく其範圍内に於て進ずべきことと、徒に形而上の理想に走り

天下國家を以て滿身の假本尊となすが如きは決して諸子の爲めに取らざるなり余は敢て言はん海運業は自家一身の處世策よりするも將又た帝國の護國策よりするも未來諸子が最屬望すべき事業の一なるを今余輩をして忌憚なく言はしむれば手土陽の俗文蓮花の如く旺盛を極め太平の雲轉た清らかなるに似たりと云へるも是れ只南枝一点の春風にして疇弊の病根深く鄉等諸子の心腸と腐らし損得よりも理窟と云へるが如く憐、無邪氣なる三五の少年が腦を己に無數の政治思想に胚胎し一擧天下を呑むの氣慨はあれども更に首を實益の上に回らし眼を實業の上に注ぐものなきは遺憾なる、余は諸子に向て政界の提灯持たらんよりも、寧ろ實業界の小僧たらんことを望むの情極めて切なり、在來我土陽の地たる偉人傑子其人に乏しからずと雖、之を往時に求むれば野中兼山の如き、坂本龍馬の如き、之を今日に求むれば板垣後藤両伯の如き、若く

は谷子爵の如き、何れも皆其功業赫々として一世の元勳たるに負かず就中板垣伯の如きは愛國の赤心其進退と相待て歩む着々常に疇閑に導くの一大元動力となり、數十年來の久しき常に一定の方針と德義とに從ふより舉國の人心靡然として政治界に馳するは固より怪むに足らず と云へども抑又分轄氏カ叨に政尊實卑の謬見を持し徒に空理空文の末技を鼓舞奬勵したるも確カに其副因たると疑はず、余は政界に奔走する勿れと謂ふさのにあらず、要は只だ青年諸子が未來一國の中心点たる有形學を捨て却て形面上の空想に走り政治以外又功名富貴の宿るを知らざれば決して喜ぶべき現象にあらずと信ず、之を列國の大勢に照らし之を帝國の實況に鑑みるも今諸子が實利實益の範圍内に於て進退すべきを吾輩半素の持論たり、況よ帝國海運業の今日あるは其基礎全く九十九商會の創立は實に我岩崎氏の力に依り

しにあらずや、果して然らば帝國今日の海運は土州男子の賜なりと云ふも誰か亦疑を容れんや、回顧すれば當時我國の人士にて航運業に雄飛し能く其牛耳を執りたるもの少からず、即ち田中小一郎石川八田内田耕作三氏、如き何れも皆其錚々たるもの、然れども星移り物變りたるの今日以上の諸氏去て航界亦一人の策士を見ず、勿論現時日本郵船會社に支配人として東京に春田源之亟横濱に林民雄馬關に甲藤求巳香港に清岡卯之助の四氏ありと云へども、之と昔日の三菱時代に比それば其差果如何、況んや船舶の元動力たる海員就中船長たり運轉手たり機關手たるもの果して幾人かある、余輩の知る所を以てすれば一等機關手に久保傳二等運轉手に山脇武夫の兩名ある而已、一念茲に到る誰か亦消魂斷腸の想なけんや、故に余は難期元勳三氏の行爲を學ばんより寧易期「チルソン」たり比羅夫たるの勇氣を養成し後日航運界に雄飛し

て土州男子の氣慨を奮はんことを、萬里余が國の青年諸子に向て懇望するに躊躇にがある、風濤萬斛歐亞の天地に貫航し金船の生命財産を双肩に負ふ、誰れか又た人世の榮譽たらずと言はんや、机上好で才子佳人の情話を誦し洋上幾多の海士がなしつる鴻圖偉略を知るの士に非らざるよりは未だ以て海事を語るに足らず、嗚呼諸子よ國旗を八紘に輝し國光を宇内に揚ぐると否とは繫れて郷等青年諸君か双肩に在るを忘る勿れ、更に轉じて先輩諸子に望むらく曾て合衆國前大統領「ハリソン」曰はずや、海運振起の問題程我が國威國光に密接の關係を有するものなしと、移て以て帝國現時の實況に適中するを知らず、益々幅の精神を注で斯業の爲め海事的思想の憤發に盡力せらんことを敢て切望の至に不堪、曾て三里高等小學校には生徒の海事思想養成の爲め短艇競漕會を興せりと聞く、洵に其當を得たるものと謂ふべし、借問す母國の

紳士各位、玉水堤上稻荷橋畔銀臺高樓の内叨に安眠を貪るの惰風を去て盍ぞ孕門浦港の綠波に操帆の秘訣を盡し、若くは鏡河の湍流短艇を艤して橈聲高く漕ぎ渉るの競技を演せざる敢て之を勸むと云爾

第二信

横濱の出船

時は是れ明治廿九年九月十日一聲の滌笛と共に鐵輪濤を蹴立つる土佐丸の甲板上風濤萬丈の意氣凜然として幾多の海士を見認むるは、是れぞ日本郵船會社の第一新造船神奈川丸請取の爲め九十三名の回航員が万里の滄溟を冒して龍動に出立するところは知られたり、横濱灣内秋

風颯として海波穩なるの處幾多の見送人が帽子を揚げ「ハンカチーフ」と振り万口一音其首途を祝する有樣思はず人をして悲壯感慨の情に堪へざらしむ、況んや澄碧一望瑠璃を欺く築港の外青巒影を倒にす、觀音崎の邊爰暫しの訣れと首を回せば一朶の紅雲野毛山の麓を罩めて市街の風光寸眸の裡に落ち全市の形影依々として坐に名殘を惜むが如き

嗚呼海上の勇士たる彼等今や鵬翼万里長風に鵬し大鯨千里滄海を蹴て遠く異郷に航せんとそ、其心事の壯且つ大なる誰か亦疑と容れんや、然れども一片の愁雲其胸中を鎖し船頭千万無量の感慨に沈むは是れぞ海士が弟妹兄姉に對する同情の涙と知られたり、憐れ昨は月を本牧に賞し花と野毛の麓に訪ひし彼等も今日よりは波上の健兒となつて船と家とし海を友とせん、雲山渺茫前途幾千里思ふて此處に到れば知らず

昨宵の殘夢將た誰家にか落ちん、夜半の鐘聲客船を掠めて恨を惹くこと最と長し！、斯て船は黒煙を吐きつゝ進み行しが翌朝に到りて天氣何となく穩ならず、風濤次第に加りて船体の動搖甚く、紀州大島沖に至る頃ひ、俄然一朶の密雲舞ひ下ると見へしが、見る〳〵乾坤墨を流して一陣の暴風颯と吹き來り、滿目渺茫四顧暗憺十重廿重山の如く捲き來る怒濤は船を掀翻して其音凄しく、加之雨さへ交りて航海最と難儀と重ねければ風濤益高く或は絶巓に或は窮谷に漂ひ轉輾風の音、濤の響と相和し其喧騒大方ならず、實に近來絶世の一大暴風雨なり、去れど波上の健兒を以て自ら任ずる彼等暴風怒濤は吾今更何をか恐れ何をか驚かんや、否暗夜船頭に立て狂風と叱咤洋上泰然として激浪に鞭つ誰か豪快ならずと謂はんや、然れども這般大海の趣味を解するもの天下

將た幾人かあるゝ、夫の月を觀て興し花を見て狂ふ輕薄男子如何ぞ海士の鐵腸忖度するを得んや、嗚呼誰か挺身命を輕じて斯業の勃興を期するものぞ、斯て爲之船は豫定の時日に後るゝこと一日即ち三百四十六哩の航程一晝夜と十九時間を費して十三日拂曉無事神戸港に入港なしぬ

神戸港　此地にて凡千六千餘噸の歐洲行貨物を搭載し十六日午後五時下の關へ向け錨を拔きぬ、此日天氣晴朗海波徐々動きて人意自ら爽快を覺ふ、顧れば金剛千早の諸峯は巍峨として白雲を凌ぎ万頃の波濤皓々として青松白砂斷續の間近く須磨明石の絶勝を望み、泣て明石の浦風や通ふ千鳥の淡路島、江崎燈臺を左に見て進めば歸帆風を孕て欸乃の聲漸く遠く、淡煙波に迷ふて暮色黃昏を鎖し波を彩どる斜照の名殘何時しか消それば、一輪の海月天に懸て氣滿く万波溶々として細漣球

を捲くの處、波動けば一痕の破月となり、風歇れば一團の滿月となり滿月皓々として寂寞を破るは、只本船の徐々波を截る音而已、若夫れ夜半甲板に出でん乎、銀月音なく斜に面を照らして白露滴らんとし、幾萬の流星水に碎くるは知らず何れか影にして何れか形なるを、嗚呼此良夜に對し誰か今昔の感なけんや、觀よ家鄕遠征を憶ひし陣頭の月は沖天萬里を照らす波上の月に非らずや、赤壁の下槳を橫へし千歲の月は今宵濤に碎くる播磨灘の月に非ずや、年々歲々月は同じと云へども年々歲々人は同じからず、噫月は古今を照らし萬國に垂るゝも、首と回せば英雄已に白骨、人生の窮達浮沈眞に是れ一枕の夢、月若し意あらば語れ聞かん古今興亡の迹、不語、丈夫鐵石の腸を斷つ最と深し、況や國を去て茲に四歲東航西馳志望未だ成らず、今宵家鄕と指顧の間に望むも身は是れ天涯羈旅の客

伴生の理想懐を故山に寄すれば滿眼の景物一として涙の種ならぬはなし、實にや彼の

古郷は馴れぬ嵐に道絶へて旅寢に懸る夢の浮橋』の古事の忍ばれて今ぞ知る望郷戀里の情轉た切なるを、借問す故郷の知己諸君、五臺山下、青柳橋畔玉江の海の漣清き吸門十景の風光今將た如何ん、一念此處に到らば魂は飛て故山に歸らん矣、千感萬慮胸を刺して難就眠、斯かる内にも無心の月は益光を添へて前路を照らし無情の船は益黒煙を吐きて疾航矢の如く翌曉目を醒せば船は早や兎しか瀬戸内に入れり

煙波千里の湖上一望碧として鏡の如く両岸の翠巒迭に秀明を競ふて一峯逈れば一岳迎へ、嵐峽秋は高くして路窄く、右は斷崖絶壁急潮岩に碎けて飛沫雪となり左は松樹鬱蒼として流水閑なるの邊、老翁一竿の釣を垂る實に萬眼の風光書も及ばぬ風情なり、左れど世の常の旅なら

ぬ天涯孤客の身には名に負ふ天下の絶勝も徒に憂を催すの種ならぬはなし、憶ひ起せば壽永の昔秋の頃、平家の一族は西海の波に漂ひて憐れ壇の浦底の藻屑と消へ行きしに非らずや、國亡びて山河存す湖上の風景は依然として千歳の觀を存するも、首を回らして當時に溯れば誰か一門の末路に同情の涙なけん夏卿や兵ものゞもが夢の跡、觀し來らば平家幾代の榮華も眞に是れ波上一片の夢と消へ了らん、又彼を思ひ是を考ふる内船は早晩しか二百三十四哩の航程恙なく、翌十七日午後三時半下ノ關に入港す、直に石炭の積入に着手す、此地にて凡千百六十二噸の焚料炭を搭載し、十九日午後五時拔錨香港に向ふ、此間海上極て平穩一千二百二十五哩の航程恙なく、廿四日午前七時香港に入港す、此地に碇泊すること一日、歐洲行貨物凡四百餘噸を搭載して、翌廿五日午後三時半拔錨新嘉坡に向ふ此間亦海上極て平穩、千四百三

横濱の出船

十七哩の航程恙なく十月一日午前六錠新嘉坡に到着碇泊すること三日間歐洲行貨物凡二千餘噸を搭載して、同四日午前拔錨秘南に向ふ、三百八十一哩の航程恙なく翌五日午後同地に入港す。

秘南港　秘南は英國海峽殖民地の一にして一葦海峽に因て馬來半島と相隔り、所謂馬拉加海峽の關門たり、其面積百七平方哩人口凡七万五千を有する一小島に過ぎず、聞說此地素地磽角人口稀少滿目荒涼たる僻遠の漁村に過ぎざりしが、今を去ること殆ど一百年英國政府の版圖に歸してより全島の面目茲に一新し曾て殖民事務局を設けて馬來半島の中心となりしより、其繁榮頓に增進せしも地理上の形勢は航通の自由と阻格して終に千八百六十七年を以て英國政府は殖民事務局を新嘉坡に移したり、於是乎從來の富は悉く新嘉坡に吸收せられ曾て全島に冠たりし市街の光景も最と寂寞と加へて現時は只だ五六の小蒸滊船が

馬拉加海峽と通じて馬來東嶼及スマタラ地方に航通するある而已、而其產物の如きも僅に砂糖及「タヒチカ」の數種に止まり、隨て海外貿易に彷彿たるものあり、即ち前岸「ラエレスレー」と相擁して一葦海峽と形作り、急流奔湍水勢極めて猛烈なりと云へども、灣內水深きを以て大船巨舶の碇泊最も便利なり、加之港の入口には望樓ありて入港船舶の合圖をなし、海岸亦一帶埠頭を築きて埠上棧橋を架し、海中には無數の浮標を投じて水の深淺を測量し、常に之と浚渫する等其海事上に對する注意に到りては流石英人の氣象に恥ぢずと謂ふべし、徵々たる秘南の港灣すら尙且つ然り、顧て帝國現時の實況に及べば誰か一片の嘆聲なけんや。

居民は十中八九分迄支那人にして馬來人白哲人の如きは僅かに其一小

部分を占むるに過ぎず、隨て大なる商店を有し弘く取引するは何れも支那人と知るべし、此地元來帝國との貿易上に於て前途甚だ多望ならざるより、我商人の茲に開店するものなき寧ろ當然の事なれども、只だ遺憾なるは一百二十四名の我娼婦が公然市街の中央に居を卜して或は外妾となり、或は娼婦となるの一事なり、香港と云ひ、新嘉坡と云ひ、將た秘南と云ひ、天涯到る所として我婦人の醜狀汚体を極むるは如何に吾人をして赧然たらしむることよ、征清の一擧國威宇内に揚り國光八紘に輝きしは吾人之を疑はず然れども年々歲々是等の醜婦が海外に密航して我戰勝の國威に一大汚点と與へつゝあるは如何に嘆ずべきに至りならずや、千里の長堤も螻蟻の一穴より崩る、我戰捷の榮譽を全ふせんと欲せば、將來其密航を嚴禁すると同時に全力と擧げて是等醜婦娼妓の根を斷ち葉を枯らすの策を講ぜざるべからず、當局者今日の所置は未だ以て十分なりと謂ふべからざるものあるも、余は前航已に詳論したるを以て今茲に再言するを欲せず。

嗚呼天下悲慘の事多し、若夫れ絶代の鴻圖を抱て世に容れられず坎坷落魄江湖に放浪し世を恨み時を慨み自ら又に斃るが如き、或は三年の眞操を守り一百里の砂漠を超へ夫の戍所に到れば塞外霜寒にして唯だ白骨の累々たるを見るが如き、何れも慘の慘たるものなり、然れども夫の天眞爛熳たる二人の幼女が遠く異鄉の空に朝に黑人を送り、夕に白人を迎ふ流離轉々生きながら婦道の辱を受けつゝあるに比して其差果して如何、借問す江湖幾多の女丈夫よ、鄉等今此消息に接し果して何等の感想かある噫。

第三信

明治二十九年十月八日、殘月近く巴峽に落つるの曉、秕商港を拔錨して馬剌加海峽を航し、左にスマタラ右に孟加拉灣を望み水大旁薄の間千二百七十八哩の海上席の如く名にし負ふ印度の靈境錫蘭島と後にして亞拉比亞海の風濤も至極穩かに同月二十六日午後四時亞丁灣に寄港しぬ。

● 亞丁の景　（亡國の市民）

抑亞丁は亞拉比亞の西南端即紅海の咽喉にある一小半嶋にして一葦の地峽に依て本土と相連絡す其面積七十方哩人口四万一千九百十二人を有する小市街なり、峨々たる禿山海中に突出して亞丁灣をなし波濤巖に激して岸打つ涙の音高く、大船巨舶の碇泊に最も便利なり、聞く此地は今より五十八年前即西曆千八百三十九年を以て英國の占領する處

となり、爾來孟買政廳の管轄に屬して文武の駐在官之を統御し鋭意熟心開墾の策を講せしに其結果空しからず、今や兵營幷石炭貯藏所と設けて陸海軍の防備を嚴にし全土の風物稍々改良の緒に就けり、要之亞丁は天然の地勢紅海の咽喉を扼するより、山上幾多の堡砦を築き其狀恰も蜂巢の如く、島外能く四隣の形勢を制して地中海のザブラルタルと雖々相對し共に東西の鎖鑰たり、然れ共其地味磽确不毛にして滿山禿々として火山の如く亦た斷崖峭料たる巨巖に似たり、故に貿易の如きも其範圍極めて狹く僅かに亞拉比亞の內地若くは亞非利加の沿岸と交通せるに過ぎざる而已元來此地は貿易港に非らざるを以て每歲凡ろ千五百噸の船舶出入すると雖も、重に歐亞航海の滊船にして郵便物の揚卸若くは石炭飲料水の搭載に過ぎず、故を以て其地理の優勢なるにも拘はらず商業の微々として振はざる敢て怪むに足らざるなり昨年の

統計に依れば輸出貳百拾壹萬貳千八百六拾四磅輸入貳百五拾五萬〇四百貳拾七磅にして重に石炭の輸出入其大部分を占む。

住民は重に亞拉比亞人波斯人土耳其人西班牙人英人等にして就中波斯人其大部分を占む、隨て宏大なる家屋に住ひ多少の資本を卸して手廣く商業を營むものは何れも皆同人種と知るべし、英人は重に回漕業に從事して各國汽船の代理店若くは石炭の販賣となり敢て是等人種と毫も其利を爭はざるもの〻如し、此間に立て獨り憐れなる生活を送るは亞拉比亞人なりとす、彼等は未だ矇昧野蠻の域を脫せず甘じて賤業に服し人の爲めに勞し人の爲めに糊口を、其狀恰も新嘉坡に於ける馬來人に髣髴たり。

嗚呼誰か謂ふ蒼田變じて海となり墓陸耕して田となる、觀し來れば國家の興亡眞に是れ黃粱一炊の夢、遙に思を寄せて既往に溯れば、紀元

六百年の頃ひ國威隆々として西歐東亞の間に響きし刀光劍影の下、巍然として其福音を傳へし亞拉比亞の偉人回々教の開祖マホメットの子孫も時移り星變りて終に國を成す能はず、オトマン帝國の馬蹄に懸り再轉して英國の屬領となり、今や轗軻落魄市井に彷徨して空しく亡國の民となりぬ、亞拉比亞海上亞丁の山河は依然として千歲の觀を更めざれども、秋風颯として亡國の民を吹き拂ふ何ぞ夫れ無慘なる、退て考ふるに邦國の興亡は一に宗教家の存否に伴ふものなきや、觀よ釋尊の起りし印度は如何、信度河の流は滔々として千古に盡きざるも家國既に亡びて生民奴隸となりぬ、基督の起りし猶太は如何、寒月空しく邪爾撒冷の趾礎を照して社稷今將た何處にかある、由來是等偉人の殘せし心靈界の感化力は宏大無邊なるにもせよ而かも亡國の民となつて流離困頓人生の悲慘を極むるは古今東西其揆を一にす豈亦た奇ならず

や、何故に彼等は永遠無窮の宏圖を立て以て國家万年の壽命を期せざるぞ、若夫れ宗教の目的は理想界に在りて全能の神を信仰せんが爲めには國家と無にするも可なりと言はゞ余輩又た何をか謂はん、亞拉比亞現時の慘狀に察し印度覆滅の今日に鑑み、更に猶太滅亡の當時に聯想せば國家の衰亡し人民が蓁蕪する豈夫れ所以なしとせんや、語を寄す、亞拉比亞州亞丁原頭に立て遙に東方を望めば安南は亡び、ビルマは呑まれ、暹羅倒れんとして波斯埃及漸く危く、印度既に滅び中央亞細亞亦た其主を替へ、西伯利亞、滿州樺太、タスキンは露領に歸し、アフガニスタン、ベルヂスタン、ヒンヅスタンは英領となり、呂宋、カンボヂヤは西、佛の下に、澳門、亞拉比亞、猶太は蒭、土の下に支配され加之朝鮮動きて支那蠶食せられ、東亞の天漸く晦冥ならんとす、而して此間に立て皇統連綿天壤と窮りなく能く國威國權を顯揚して巍然其獨立を維持するものは唯だ夫れ大日本帝國ある耳、

帝國が東洋文明の先覺者として將た憲法政治の卒先者として未來の亞細亞に對する責務亦た大なりと謂ふべし將軍モルトケ揚言して曰く『歐洲の平和を維持するものは只夫れ我獨逸なり』と余輩は言はんと欲す、亞細亞の平和を擔保するものは只夫れ我帝國なりと、言を替へて之を云へば帝國在て始めて東洋寧しと云ふ可く更に一歩を進むれば帝國の隆替は眞に亞洲大陸の存亡に一大連鎖を有するものなるを知るべし、嗚呼東洋の天は今や狂瀾怒濤未だ巖礁に碎けざるも悲風漸瀝已に岸頭を掠めて寒月向く、暴風猛雨尚ほ未だ到らざるも烟霧濛々正に海上を鎖して一天闇きの觀あり、眞に危機一髪の時、謂ふべし誰か言ふ今日の平和と光榮は之を十年の後に期すべからずと、然り風雨慘憺

學國の人士を驅て武裝せるスバルタとなすは何ぞ夫れ十年の後を待たんや、徒らに區々たる戰譽に狃れ苟且偸安奢侈に流るゝが如きは識者の固く取らざる所、日本國民たる者大に猛省警戒するとなくして可らん哉。

※　※　※　※　※

此地氣候頗る炎熱にして日中は寒暖計常に九十度以上に昇る、夫の亞非利加の三分一を掩ふサハラの大砂漠は遠く大西洋に起りて紅海に達し、其砂漠帶は紅海を超へて亞拉比亞砂漠となるを以て、之が爲め空氣は常に乾燥して炎熱最とも劇烈を極む、加之降雨頗る稀にして一年一回若くは三年二回甚しきに至ては五年の久しき降雨を見ざるとありと云ふ、故に四時の風物は枯稿凋落して山に一の草木なく地に一の綠草なく滿眼の風光轉た寂寞たるを覺ふ、斯る有樣なれば日常必需の飮

料水そら之を得るの途なく已むを得ず山の半腹に蓄水場を設け山上より流下する雨水を貯溜して飮用に供せ、されば其價の不廉なるは云ふ迄もなく市民の之を吝惜尊重すること大方ならず、時に妙齡の處女之を瓶に詰め頭上に戴きて水や水やと市中を馳せ行くこと恰も盛夏の候我國に於て氷々と呼び歩くに異ならず、而して此貯水場の在る處は海岸を去ること凡そ二哩亞丁市街の在る地なり、余等一日之を觀んと欲し同行三人駱駝に騎して到る、駱駝は余が本國に於て見慣れざる獸もなく氣味惡しく思ひたりしも多年土人の馴致せるものとて一言一語能く其命を聞き温柔なること山羊の如し、余等の乘らんとするや直に地上に匍伏す、余先驅して進めば二人次で來る輕裘凭鞍揚々として鞭を執れば疾驅そること矢の如し、仰げば炎々たる日輪頭上に落ち俯せば漠々たる黃塵眼を掠めて身は宛然沙漠の內にあり、進むと里許一の狹

路に入れり、此時余の駱駝は何物にか躓きけん忽然地上に仆れたれば
余は亦た地上に轉落し痛く左手を挫きたり、余は其苦痛に堪へ兼ね今
は騎行の勇氣も衰へたると見て、土人は頻りに氣の毒がり膏藥樣のも
のと求め來りて之と貼附しけるに、奇なる哉其痛痍は忽ち消ゆるが如
く去りたり、此間多少の大厦壯屋なきに非ずと雖も五六の旅舘商店等
を除く外敢て觀るに足るべきものなし、路傍も亦目を娛ましむるもの
なけれど常に東洋絶勝の地に住して山水の明媚風光の佳絶に飽きたる
身は却て此滿目茫々として一の沈默一の寂寞を破るなき荒涼たる沙原
若くは千山万岳禿々として一の草木だになき斷崖絶壁を仰ぎ見るに及
び却て一層好奇の情を催ふしぬ、既にして其山麓に達せば巨大なる九
個の水溜は斜に山腹に沿ふて其狀恰も船渠の如く、山上より落下する
雨水の悉く流れて此中に湊りたるを更に水管を以て之を市中に導き土

民の飲用に供し居れり、蓋し天然の巨巖大石自ら洞穴凹處を生じて
「ナチユラル、タンク」となり、亞丁市民の生活繫りて一に此「タンク」
に存するは疑ひもなき事實なれども要するに後世大に人工を加へたる
ものゝ如く其結構の壯大なる世に所謂世界七不思議の一なりと謂ふ、
余等元來杖と名山大河に曳き足を海邊沼澤に運びて天下の名區と跋涉
する地質學者にあらざるを以て、風土の變化地理の變遷若くは此現象
に就き充分なる研究をなす能はずと云へども、想ふに地中酷熱帶の作
用に依り此變化を來せしものに非ざるなきか、兎に角其奇絶怪絶なる
には何人も一驚を喫するとなるべし、此水溜の傍に一個の古市あり斷
巖巨壁を穿鑿せしものにて其深さ幾十丈あるを知らず、清水滾々とし
て湧出るも番卒晝夜之を嚴守して容易に人を容れず、其形狀は恰も我
琴平神社の井戸に二倍して其開鑿當時の困難は實に左ころと思ひやら

れたり。

聞說此水溜は今を距ること凡ろ三百年の昔、土耳其人の加工創設せる所にして其容積は三千万瓦を容るゝに足り工事には莫大の費用を要せりと云ふ、然れども素是れ天然の雨水を貯蓄して更に人工を加へざるより其水質の不良なる決して吾人の飲用に供すべからず、故に此地在留の歐人は別に蒸溜場を設け海水を蒸溜して常に之を用ひ各船舶の如きも亦概ね蒸溜水を使用し居れり、今回本船にて三百噸の蒸溜水と購入せしが其價一噸に付七圓五六拾錢の割にして殆んと日本に於ける氷の代價と相均しかりき、以て土人が一般飲料に供する水の如何に高直なるかを知るべし、此地には一の學校なく唯だ僅に二三の回々教及基督教の會堂ありと雖も、此所に往來するは重に上流一部の人士に止まり一般の土人は文化の域に達せず其賤劣無氣力にて狡猾なるは恰も印度

人と伯仲の間にあり、余等歩行中五六の兒童來りて頻に錢を乞ふあり乃ち若干の留貨を與へしに彼等の間に忽ち一場の喧嘩を惹起し、耳目口鼻の嫌ひなく當るに任せて乱拳毆打し遂に出血する者あるに至りしかば、余等驚て之と制せんとせしに何ぞ圖らん是れぞ亞丁に有名なる子供喧嘩の觀物ならんとは、此一事に因て見るも彼等が未だ普通教育の恩化に浴する能はずして矇昧無智の境遇に安んぜるの一端を推知するに足べし、此地駐戍の兵士は凡ろ五千人ありて内二千人は英人三千人は土人より成ると云ふ、嗚呼其面積百二十一万九千方哩を有して北は亞細亞土耳、其東は波斯灣オマン灣、南は印度洋亞丁灣、西は紅海に到る、此廣漠たる領土も今やオトマン帝國並に英國の併呑する所となり支離滅裂、昔年の榮威今將た何處にかある、メッカ及びメヂナの地はマホメット生誕の靈地として將た亦其墳墓の地として偉蹟千歳に

秀づるも今や空しく史上一片の殘影となり了んぬ、吁此亡墨に對し誰か亦一滴の俠涙なからんや、夜半舷頭に立て天を仰げば亞丁灣上一痕の月は依然として古今を照すも山河存して國亡ぶてふ彼等の末路も亦憐なる哉、失のダーヴインが唱へし優勝劣敗の理茲に其好鑑と殘して一寸の心に千古の恨を抱き感慨無量辛うして眠に就きぬ、翌曉笛聲に驚きて夢を破れば船は早晩濤を蹴立て紅海に入れり。

※　※　※　※　※　※　※　※　※　※

● 紅海の景　（古代の遺跡）

九月二十八日午後四時亞丁灣を辭して紅海に入りぬ、紅海は其長さ一千三百八哩、最狹の幅員二哩にして地中海を經て歐洲に到るの船舶は

必らず路を此所に取らざる可からず、兩涯相望る所兎として我內海に髣髴たるも對岸の諸峯は悉く禿童にして一の樹木なく其風致に乏しき之を我が靑巒碧峽山高く水淸き瀨戶內の景色に比せば固より同日の論に非らざるなり、由來雪山英雄を生し秀峰偉人を起すとかや、海舟翁が詩に『扶桑聳天外、常是生慶雲、皇家千歲土、豈容他斧斤』と我の榮え彼の衰ふる豈夫れ所以なからんや、又櫻洲山人が『烟鎖亞羅比亞海雲迷亞非利加洲、此身遙在靑天外、九萬鵬程一葉舟』とは久しく人口に膾炙せる所、右を眺め左を望むも見渡せる限り雲烟濛々として眼底に入るものは只茫々たる沙漠と峨々たる禿山あるのみ、如斯滿眼の風光は轉た寂寞を極むと雖も、其潮水は頗る緩漫にして万頃一碧鏡の如く漣漪船に碎くる所波心激灩として金色を呈し白鷗天に沖して雪晴空より落るかと疑はる、若夫れ明月晩潮を掠て氷輪波に映するの時極目渺

茫として際涯なき亞拉比亞の沙漠、絶壁万仞屏風の如き亞非利加の諸峯を望み舷頭徐々起て浩然の氣を養ふ豈亦た多少の愉快なしとせんや

倘へ云ふ茲地は夫のモセスが一大奇跡を遺せし所にして今を去ること數十年の昔、埃及王ハーローの時に當りイスラエル人を虐待すること甚しく悪虐暴戻日に募りて其底止する所を知らず、遂に産婆に命じてイスラエル人の男兒を悉く殺さしめんと謀りたりき、然るに或日の事なりし、王女は其侍女を從へてナイル河邊を逍遥しつゝありしが偶々一個の函舟流れ來るを觀、拾ふて之を披けば内にイスラエル人の乳兒悲鳴を擧げ涙に咽びつゝありし、王女之と見て坐ろに同情の念禁じ難く直に之を救ふて其母親と尋ね若干の金を惠みて窃に之を養育したり何ぞ圖らん是れぞ後世基督教の大豫言者として聖書に名高きモセス其人ならんとは、斯くてモセスの成長せし後王の兒暴は益々太甚しきよ

り、竟に同胞の慘狀と見るに堪へ兼ね之を引卒して紅海を渡り迦南の地に遁れんとせり、然るに此事早晩洩れてハーローの耳に入るや彼は直に軍勢を差向けて之を追撃したりき、時しも一叢の雲柱現れて暗黒の内に埃及軍を包みしもイスラエル人は却て之に照されて遁路を得たり、是に於てモセスは紅海の岸頭に立て手を擧げば一陣の東風颯然として起り、大海の水両つに別れて乾地となり海水恰も城壁の形をなして其間自から徒渉すべし、而してモセス等の一行悉く渡り終りて埃及軍の將に渡らんとするや、海水再び合して埃及軍を覆沒し海水爲めに紅色に變せしと云ふ、是れ則ち紅海の名稱の因て起りし基源なりとかや。

紅海の水は六月より九月に至る迄常に印度洋の時風に依て逆上せられ潮勢稍々急激なりと雖も、十一月より五月に至る六ヶ月間は却て印度

洋に逆潮し隨て水勢頗る緩漫なりとそ、而して此時風の間亞丁灣の潮流は東方遙にヒンスゴラフに進み更に亞非利加の東北ガダーフヰー岬に觸れて西方に流れ、遠く子午線四十七度の北方に到りて曲線を作る其速力は風力の强弱に依り多少の變化ありと雖も大抵一時間一哩半乃至二哩なりとそ、其潮水干滿の時は一時間乃至二時間或は一尺以上の分量を以て規則正しく常に之を增減し其間毫も變化あると見ず、又夜中に於ける滿潮は十一月より二月に及び日中に於ける滿潮は三月より十月迄の間にありと謂ふ。

凡そ船舶の紅海に入るものは冒頭第一ペリム島を迎ふべし、該島は西曆一千八百五十五年を以て英國の所有に歸し其面積七方哩人口僅に百五十人を有する一小島にして今は亞丁の附屬地となり孟買政廳の支配する所なり、此地有名なる燈臺ありて紅海出入の船舶には至大の便利を與ふ、本船は彼を迎へ是を送り幾多の船舶を後にして進むこと愈々速かなり、北方遙に突兀として雲霄に聳もるは是れ何れの高嶺ぞや、傳說に依れば是れぞ則ち彼のモセスが登山して神の默示を得、然して後聖書を記したりと云へるシナイ山なりと、双眼鏡を手にして遙にこれを眺むれば一朵の白雲朦朧として深く山嶺を鎖し瑞氣靄々として山麓に滿つるが如きは千歲の下人をして尙は敬愛の念を起さしむ、斯くて紅海も恙なく航過して十一月三日蘇士灣に投錨せり。

●蘇士市街の光景　（埃及の末路）

蘇士は紅海の盡頭運河の入口にありて人口一万九百十九人を有する一小市街なり、亞拉比亞亞非利加両大陸の相連接せんとする處紅海の水を涯りて一大灣を形作る是　即ち蘇士灣なりとそ、灣内水深く波清く大船巨舶の碇泊に便利なり、波間幾多の巨鰐出沒し人若し錯て落つれば海水忽ち紅色に變すと云ふ實に恐るべき事ならずや、四圍の風景は亞丁幷に紅海と異なるなく全土渺茫として眼界に達する所沙漠にあるさるはなし、市街は灣の北端沙漠の中心に位し運河會社製造所、官有武庫製作場及び船渠等ありて多少の壯觀を極む、船渠は長さ四〇三呎幅（入口）七三呎、深二九二三（普通滿潮の時）あり、高潮の時は七呎低潮の時は四呎を增して大船巨舶の入渠に適す、然れども近傍一の工場及び倉庫の設けなきより船体機關の修繕は勢ひ古設のピーオー會社製造場に依頼せざる可からず其不便推して知るべきなり、此日各國濠船の碇泊するもの四隻、檣頭高く英獨佛土の國旗を飜へし轉た港内の壯觀を添ぬ、本船亦た日章旗を颺へして優然灣内の綠波を蹴つて徐ろに其間に投錨したるは洵に心地好き次第なりし。

元來此地は歐洲人の住居そる者なきに非ずと雖も埃及政府の管轄に屬するを以て諸般の事未だ改良の緒に就かず就中其道路の如きは頗る狹隘不潔にして一般人民の住家は粗末なる石造の小屋に過ぎず、故に若し官有武庫製作所等二三の建物と取拂はゞ蘇士は宛然たる廣原沙頭の一寒村に過ぎざるなり、然れども其地味に至ては亞丁の如く礫礪ならず、夫の國中を環流そるナイルの河水の引て灌漑に便せるを以て多少の穀類野菜そ産せざるに非ずと雖も、而も沿岸人民の需用を滿すに止

まり廣く外國に輸出するに足らず、市中鐵道を架してイスメリヤに通じ毎三十分に往復そ、又首府改羅には公道を設けて往來を便にする等内地百般の改良は亞丁に比し大に優る所あり、故に埃及内地に到らんとするの士は先づイスメリヤに赴かざる可からず、此地には全國を環通する一千百五十八哩の鐵道は二時間毎に發車してタンタ、ナレソーケー、亞歷山得亞、改羅其他内地の市街に行くを得べし、即ち一日にして一端より一端に達し扱ては「ピラミッド」の偉蹟に千歲の昔を忍び「スフアングス」の遺物に万古の感を寄するも亦妙なるべし、況んや近時埃及に於ける古物學の研究は大に其歩武を進めたるに於てをや、夫の一千八百八十三年を以て創立したる地中發掘事業の如き若くは同九十年埃及歷史研究の目的を以て興りたる古物學會の如き、其研究の進み開掘の捗るに隨ひ珍奇稀有の古物を發見して古代の埃及、アッシリヤ、小亞細亞、西利亞、希臘及び地中海沿岸人民が如何に發達せしかを講究し文明史上更に幾多の光彩を放ちぬ、而して是等の古物奇品は重と埃及博物館に陳列し運搬に便利なる殘餘のものは英米其他大陸の博物館若くは古物展覽會に分配し一般公衆の觀覽に供せり、今や埃及に於ける古物學の研究は世界學者の注意を惹き、或は繪畫となり地圖となり寫眞となり彫刻となり書籍となりて世間に公布せらるゝもの少なからず、現にサンマースクラーク氏の如き或はチクスホルド學士會員グレンベル氏の如きは最も熱心なる斯學の大家にして從來之に關する著書頗る多し、就中方今埃及學者として名を知られたるフリンダースペトシー氏の如き近時ナイル西岸の地に於て一都市の遺跡を發掘せしが、其中には殆んど二千個の墳墓あり之れに依りて今より五千年以前此地に一種奇体の新人種住居せしならんとの鑑定を下し得たり、

蘇士市街の光景

且亦た埃及政府は探究資金を支出して是等發掘の事業を奬勵せるを以て、有名なる歐米の古物學者にして足を此地に留むるもの少からずと兎に角埃及世界最舊國の一として其名所舊跡に富むは夙に世人の知る所、歐洲漫遊の旅客にして途すがら杖を此地に曳きて古を吊ふも强ち無益の事には非ざるべし。

住民は重に埃及人土耳其人及亞拉比亞人等にして就中埃及人其多數を占むと雖も、熱帶國の常態として人民何れも惰怠遊逸に耽りナイル河邊鰐魚を逐ふて之を斃すの術は知れど牙を磨して將に其國を呑んとする鰐魚よりも尙は恐るべき虎狼の在るを知らず、僅に地中海を經て歐洲の大陸に近接するも廣く宇內の大勢に眼を注いで外國との航通を營むものなく國力日に疲弊して老朽半死の慘狀に瀕せるは洵に憐れむべき限りとや謂はん。

嗚呼其面積殆んど四十万方哩人口六百八十四万八千人を有して四千年の昔既に富强を以て四方に鳴り、就中「クレミー」王朝若くはクレチバトラの時に當りては文化大に進み國威隆々として宇內を睥睨せしも、移れば變る末路の埃及國今や南は僅に首府改羅よりナイル河上七百哩の地北は地中海東は亞拉比亞及び紅海、西はリビー及びリヤバンの沙漠と界とし、而かも土耳其主權の下に喘々焉として漸く其餘命を維ぐにあらずや、誰か謂ふ肉腐れて蟲生ずと、禍根深く蝕して容易に拔くべからず、識らず今より幾年の後印度の覆轍を踏んで喪家の狗となるなきや否や、請ふ余輩をして少しく現時の埃及問題幷に亞非利加內地に於ける歐洲諸强國の政略に就き語る所あらしめよ。

※　※　※

※　※　※

※　※　※

※　※　※

夫れ埃及は世界最舊國の一にして今を距る四千年前既に富強を以て聞え世界屈指の開明國として國威四隣と傾けたり、就中「ツレミー」王朝の時に當りては文物技藝燦然として非常の旺盛を極め、夫の歐洲文明の母とも稱すべき希臘人すら其始めは埃及人に就て學ぶ所ありたりと觀よナイル河畔大小併せて七十餘個の尖塔は巍然として雲霄に聳え累代國王の墓陵として如何に壯觀を極めしよ、幾多の宮殿伽藍は今も尚儼然として碧苑朱欄日光に輝き繪畫彫像卓然として千歲の偉觀を留むるに非ずや、精工妙技の斷片すら尚且つ埃及往時の隆盛を示して餘あり、況んや以上の偉蹟に因て以て國土開明の當時を考察をべく、因て以て國家富强の程度を聯想すべきも、興廢弛暢は古今の常慣、一度退歩の逆運に向ふや流石万代不易と聞えたる埃及の土地も滅亡瓦解の期漸く到り一轉して亞歷大王の馬蹄に蹴られ再轉してオーガスタス、シーザーの蹂躙する所となり三轉してモハメット第二世の併呑する所となり、爾來今日に至るも埃及は尚は且土耳其主權の下に其屬邦として全土亡國の悲況に沈む豈亦た悲慘の至りならずや、誰か謂ふ形骸獨存して元氣を喪ふと、何ぞ想はん木伊乃を作りし埃及夫れ自身亦木伊乃とならんとは、蓋し埃及は方今亞非利加に於て比較的に進歩したる國と云ふを得べきも而も一般の人民は尚未た矇昧暗愚たるを免れず、就中宗教上の迷信甚しく淫祠邪堂を設けて之に惑溺するより、其一躍蹶起國勢を既倒に挽回して以て土耳其の羈絆を脫するが如きは今日の國情に照し殆んど望むべからざるが如し、否な埃及果して獨立をる能はざるものなる耶是れ余輩が現時の埃及問題に就き敢て茲に考究せんとする所以なり。

觀よや觀よ、夫の希臘、羅馬尼、塞爾維、モンテグロの諸邦が各獨

蘇士市街の光景

立の旗を飜へして土耳其の羈絆を脫し、巍然として今日其國体を維持するにも拘はらず、よし「ケヂーヴ」は帝命に抗して屢々兵力に訴へしとは云へ埃及は依然として今尙は亡國の慘狀に沈むを、要之埃及はクリミヤ戰爭の時に於て已に一度其好機を逸し露土戰爭の時に於て再び其機會を誤りたるものと謂ざるべからず、何となれば當時土耳其は內憂外患交々臻り、外は露國の爲めに窘められ內は各部の藩王半ば獨立の姿をなして國力大に疲弊し又た他を顧みるに遑あらざりしなり、故に若し當時埃及をして獨立の志あらしめば一擧して土耳其の羈絆を脫する何の難き事あらんや、然るに計茲に出ず却て露土戰爭の時には六千人の兵士を送りて土耳其を援け困難の上に困難を重ねたり、假令經國の賢相濟世の勇將なしとするも、せめて現時の埃及王アバス、パシヤをして其位に在らしめは、何ぞ今日國を擧げて其抑壓に苦むとあらんや、是れ余輩が現時の埃及問題を究むるに當り一滴の俠淚禁ぜんと欲して禁ずる能はざる所以なり

渾圓球上幾多の邦國ありと雖も而も奴隸たる亡國たる先天的約束を以て出で來りたるものあらず、然るに埃及が今日の亡國となつて擧國暗澹たる悲慘を極むるは其禍源那邊にか存する、請ふ先づ余輩をして之を究めしよ、夫れ立國の要素に最大の關係を有するものは國民の元氣にありて國民元氣の消長が如何に國家の興廢と左右するかは今更謂ふまでもなき也、歐洲中古の葡和兩國が國威赫々として四海に橫行し一時覇を天下に稱したるも何ぞ知らん其淵枯落滅の日は即ち元氣消滅の時なりしと、而して近時帝國が俄然勃興して東亞の盟主となり世界強國の仲間入して天下の視聽を驚かしたるは實に國民愛國の精神、敵愾の氣象之を然らしめたるに依らずんばあ

蘇士市街の光景

らず、其他羅馬の遠く滅亡し近くは西班牙の漸く衰頽するに至りしもの原因一に元氣沮喪の結果に歸せざると得ず、果して然らば埃及今日の慘狀も其起る所は主として人民の輕佻浮薄風俗壞頽して立國の基礎成立せざりしに依れるものと斷言そべし、況んや現代の埃及王ヂユフ井ック身は老朽半死の病國にありながら、凌辱卑屈の夢未だ覺めず、叨りに豪奢華麗を好んで毫も市民の痛苦に關心せざるに於てをや、如斯して一國の繁榮を期し他の羈絆を脫せんとす、尚は木に緣て魚を求むるの愚に如かず、其成功する能はざるは蓋し至當の理と謂ふべし。

※　※　※　※　※　※

退て考ふるに埃及は建國の歷史に於て常朝なく我邦の如く皇統連綿たる宗廟社稷を有せざるより人民一般に精神的素養を缺き忠吾愛國の思

想に至ては毫も觀るべからざるなり、故に其主權者の何れの國何れの人たるに論なく人民は國家の寄生物として亦た國体の如何に痛痒を感せず、語を換れば彼等は個人あるを知て國家あると知らず、即ち世界の一國たる埃及國の位置を忘れたるものなり、夫の國亡んとすれば城と枕にし君辱めらるれば臣死を底の氣慨を以て埃及人に望むは寧ろ酷論と稱して可なり。

抑々彈丸雨注の中を冒し陣頭に立て屍を馬革に裹むは國を愛すればなり、命と鴻毛の輕きに比して孤軍奮鬪するは君恩の厚きに感ずればなり、我が容堂公が風捲妖雲日欲斜、多難關意不思家の一絕の如きは一讀の下人をして坐ろに愛國の氣象を躍然たらしむるに非ずや、又た無邊俠禪が『滿腹衷情說向誰、思民愛國枕頻欹、徹臣半夜綢繆意、唯有寒燈一穗知』とは如何に忠君愛國の精神と發揮したるものに非ずや、

蘇士市街の光景

斯心を以て斯國を護る邦家の隆興せさらんとするも豈得べけんや、然るに埃及建國の歴史は既に彼の如く現時の國狀斯の如しとすれば其將來の運命を卜知るに於て敢て難からざるなり況んや現時の人口六百八十四万八千人の内二十四万六千五百二十九人は水艸を逐ふて移住する遊牧の民に屬し九万八百八十六人は歐洲各國の土民にして殘り六百四十七万九千八百五十人は一定永住の人民なりと雖も而も多くは土耳其歸化の民にして回々教を奉じ古來埃及人の苗裔は極めて稀なるにてとや、故に彼等が埃及國民即ち國家的觀念の上に於て漸次に變化し來り終に今日の狀態に陷りしは亦是非もなき次第と謂ふべし、

今試みに一昨年の統計に依りて目下埃及に於ける歐洲人の數を擧げんに

希臘人	三七、三〇一	以太利人	一八、六六〇
墺地利人	八、〇二二	佛蘭西人	一五、七一六
獨逸人	九四八	英國人	六、一一八
西班牙人	五八九	白耳義人	六三七
瑞典人	四一二	露國人	五三三
和蘭人	二二一	羅馬尼及モンテヂグロ人	三二二
葡萄牙人	三六	亞米利加人	一八三
丁抹人	一四	瑞西人	一五
波斯人其他	一、一五〇	日本人	三

埃及は斯の如く一方に於ては漸次に國家的觀念を消却ると同時に他方に於ては歐洲冒險の徒踵を接して入り來り、就中英人の如きは近來大に勢力を得て內政に干渉するに到れり、於是乎埃及は今や一轉して土耳其の手と離れ英の屬邦たらんとするが如し、吁病膏肓に入りて不

蘇士市街の光景

治の患者となりし埃及の治療も亦困難なる哉、然りと雖も余輩が今茲に一縷の望を繋ひで埃及の前途に瞬目するものは實に現時の埃及王アバス、パシャなりとそ、王は夙に墺都維也納の學校に遊び五ケ年間政治法律を研究して文明的の教育を受け、其度量宏濶にして能く大局に通じ隨て大に人心籠絡の術に富めりと謂ふ、今より四年前其王位に即くや、果然國民の譽望を博せり、居常仰では亡國の慘狀を慨し俯しては英人の跋扈を憤り、後宮夜靜に人定まるの所獨り短檠を剪て國家の前途を察し、時に血淚の袖を沾そとあれば時に雄心勃々密に畫策するともありと謂ふ、蓋し王は少壯の身と以て其即位すると同時に英人に向ひて非常に惡感情を抱けり、假令クローマー侯の風諫に依り多少其芒鋒を收めたるが如しと雖も、而かも其大臣に非英國派の政治家ヘミ、バシヤ、ロボートロス、バシヤ、マズローム、バシヤ等を擧げて

國政を委したるが如き以て其一班を知るに足るべし、請ふ是より余輩をして埃及現時の國政並に英國の干渉する所以を究めしめよ。

抑々埃及は其開祖メヘメット、アリーの時より已に七代の星霜を經たりぬ、而して一千八百六十六年其第五世イスメール、パシヤの時に至り土耳其支丹より「ケヂーグ」即ち埃及王の尊稱を得之と子孫に傳へたり、次で同七十三年を以て外國との通商條約及び貨幣の鑄造並に陸軍の編制に關する權利を得たりと雖も、當時國歩頗る艱難の際にて諸事未だ整頓の運に至らざるに、早くも同七十五年即ち西郷南洲翁が兵を城山に擧げたる年を以てダルフォールに一揆起りて國力大に疲弊し、財政困難と搆へて一敗地に塗れ、更に其翌々年即ち西郷南洲翁が兵を城山に擧の結果は終に蘇士運河の株券を英國に賣渡すの已むを得さるに至り、加之英佛両國より財政整理の爲め二名の顧問を聘して肇機に預らしめ

たり、是れ即ち歐洲強國か埃及の内政に干渉せし濫觴にして埃及今日の禍根は實に茲に胚胎したるものなりと謂はざるべからず、其後二年にして英國は漸く勢力を得るに隨ひ終に土耳其に迫りてイスメールパシヤの位を退け其子ラヴヰツクの王位に上るや、英に對する惡感情は土に對する好意となり大に支丹を信用し、之と尊び之を敬ひ兩國の間吏に盟約を定めたり、曰く埃及國の關稅通商條約及び外國人の位置權限に關する條約は必らず土耳其帝の勅裁を經べき事、曰く平時の兵は一万八千人を限りとし内閣を組織する官吏は總て自國民たるべき事曰く新債を興すは土耳其政府の認可を得債券所有者の承認と經べき事等なりき、是に於て七十三年に得たる權利は地を拂ふて埃及は全然土耳其の屬邦と化し畢れり、然れども其機既に遲し、英の勢力は此時益々其度を加へ來り終に一千八百八十二年兩國の間に葛藤を生じ結局兵

端を開くの不幸を見るに至りぬ、大厦の將に覆らんとする豈夫れ能く一木の支ふる所ならんや、埃及末路の名士として上下の輿望と繫ぎし一世の豪傑アラビー、パシヤも時到らずして空しく錫蘭嶋に遠謫の身となりしより、動機茲に二轉して埃及に於る土耳其の政權は地に落ち去り之に反し英國の勢力は恰も旭の昇るが如く、今や土耳其の屬國と云よりも其實寧ろ英國の附庸と稱するの至當なるに至れり、誰か謂ふ前門狼を拒いて後門虎を入と埃及の現狀一に何ぞ之に類せる。

埃及の現狀は斯の如く岌々乎として危しと雖も、彼れは尚は表面上土國の屬邦として副王の下に内閣を組織し、地方行政に關する縣治局及び國家經營に關する樞密院等ありて一見自治の体裁を備ふるが如し、然れども其裏面には强大なる英の勢力潛伏して隱然國政を左右しつゝあるは前節既に述べたるが如し、觀よ國家防備の任に當れる兵士は僅

に一万九千三百三十八人にして内四千二百七十七人は英兵に屬し、而も首府改羅に駐屯して其咽喉を扼し死活の權一に其手裏に在るにあらずや、且亦た本年二月十九日十耳其帝支丹は英國政府に通牒して曰く、貴國若し印度と英國との間に絕對的航通の擔保を得は願くは埃及駐屯の兵士を引揚られよと、然るに宰相ロード、サリスバリーは之に答へて曰く、貴國の要求たるや漠然として其意を得ず、故に英國政府は斷然其請求を容るゝ能はずと、此一言に徹するも如何に英國が埃及に對して强硬の政略を執り、將又た如何に土國が埃及に於て勢力を失へるかを知るに足るべし、其他夫のアラビー、パシヤ遠謫の事に就ても英國は斷乎として露國の注意を却け、尚は佛國屢々葛藤を生ずるに至りしをも拘はらず、益々强硬政略を持して排佛の策を講ずると、以て英人が埃及に對する眞意知るべき而已。

※　※　※　※　※　※

蓋し埃及將來の成行に關して歐洲各國の環視する處、就中英佛二國の勢力が互に相衝突して早晩一大爆裂を見るに至るべきは敢て疑ふべからざる事實なるが如し、何となれば英若し之を得んか印度との航通自由なるべく、因て以て無盡の寶庫安全に始めて枕を高くして安眠するを得べし、佛若し之を得んか、東京安南交趾支那等の領土鞏固たるべく、依て以て亞非利加內地に覇を樹つると得べし、況んや埃及の遠征は奈翁以來の宿望にして亞非利加に一大帝國を作り、以て英の印度に頡頏せんとするは由來佛の國是なるに於てをや、兩國利害の岐るゝ所は即ち平和の破るゝ所以なり、知らず何れの日か悲風慘雨暗澹として埃及の天を覆ふものぞ。

本年二月アリスリヤ（紅海）に於ける以太利軍の大敗並に土耳其僧侶不穩の狀況は斷然英國をして蘇丹遠征の決心を與へ、政府に約するに必要に應じて軍隊豫備貯蓄費の中より五拾萬磅を支出するを以て直に九千人の兵士を送りてダーハルファーの境上より進軍したり、當時露佛の二國は之を拒て大に不同意を表せしも、幸に列國の力に依て英國は此目的を達するを得たりき、此結果としてナイル河上三〇哩の地スアーダは英の占領する所となれり、露佛の二國は之を見て悦ばず、百方術策を回らして之を妨害せんと欲し、會計撿査院を敎唆してナイル遠征の費用に莫大の金額を支給したるは違法の處置なりとし、大に政府を非難して既出金額を取戻さんとせしが、終に何等の効をも奏する能はざりき、且又た英のダファー領區域問題に關し獨伊兩國は之を承認して條約を締結したるも、佛國は獨り之を承認せず、而して一昨年

佛領コンゴ及び蘇丹よりナイルに向て遠征するやの風說頻りに行はれ爲めに英國の人心頗る恟々たりき、當時サー、エトワード氏は下院に於て揚言して曰く、佛國の此遠征たるや實に不親切千萬の次第にして余輩英人は佛國を目するに最早友邦と以てする能はず云々、爾來兩國の葛藤益々困難を加へ猜忌憤怨各々相半ばし、双方屹然として一歩を讓らず、風雲の動機正に分秒の間にあらんとするの觀を呈せり、蓋し埃及問題は即ち英佛の問題にして兩國輸贏の岐るゝ所は歐洲禍亂の渚む所なるを知らざる可からず、請ふ先づ余輩をして歐洲各國が此方面に於ける實勢と知らん爲め其所有領土の多寡を究めしめよ。

最近の統計に據れば各國が亞非利加に於て有する面積は左の如し

佛國	三百五十万方哩
英國	二百二十五万方哩

獨逸

コンゴー自由國　八十九万方哩

葡萄牙　八十五万方哩

以太利　九十万方哩

西班牙　六十万方哩

埃及並ツリポリー　二十五万方哩

リベリヤ共和國　八十四万方哩

ポアー共和國　三万七千方哩

其他中央亞非利加に於ける未定の領地百五十万方哩

此の如く世界大陸の五分の一即ち歐洲大陸に三倍する此廣漠なる土地も今や各國の分割する所となりてより、從來人類社會に孤立せる亞非利加の内地も國家文明の基礎たる開拓事業の進歩と共に益々其富源を開發して今や殆んど世界無二の寶庫となれり

本年二月十五日發兌の「タイムス」新聞は亞非利加全國の貿易年額を凡そ一億萬磅と註せり、之を我貨幣に換算すれば實に拾億萬圓の巨額に達す、而して今更にザンバシーよりニーガルに至る熱帶地方のみに於ける各國領地の貿易額を擧ぐれば左の如し

國名	輸出	輸入	合計
英領	四、七二〇、〇〇〇磅	九、四三五、〇〇〇磅	
佛領	一、〇五〇、〇〇〇	二、四五〇、〇〇〇	
獨領	七一〇、〇〇〇	一、四九〇、〇〇〇	
葡領	一、〇六一、〇〇〇	二、二八三、〇〇〇	
以太利領	―	五〇〇、〇〇〇	
コンゴー	三〇〇、〇〇〇	七〇〇、〇〇〇	

リベリヤ

由是觀之領土上其優勢を占むるものは佛蘭西にして貿易上優勢を占むるものは英國なりとそ、是れ兩國の勢力が亞非利加に於て相排し相斥そる所以にして風雲慘憺たる原因是に存せり、況んや佛國は地中海に面せるアルゼリヤ及びチユニス等の開化したる領地を有し尚進んで目下沙漠鐵道を起さんとを計畫し、政府は曩に世界有名なる工學士に諮問する所ありしがブルーセー氏の如きは既に之に應じ其設計を爲したりと謂ふ、勿論是は天下無絶の大事業にして其困難容易ならずと雖も而も方今は工學全盛の時代豈必ずしも成功の見込なしと云はんや、夫の一千七百英哩の運河、七千露里の鐵道にして完成するものとすれば佛國豈鐵道を成就そる能はざるの理なからん、若し佛國にして此サハラ沙漠貫通鐵道を完成するの曉は即ち亞非利加内地一大革新の時にし

て、佛國が貿易上軍事上優に亞非利加の覇王たるは固より因て以て一大帝國を興し英の印度に頡頏せんとする宿望に於て其志と達するを得べき歟、蓋し既往の形跡に徵そるも英佛二國が相衝突そるは到底避くべからざる所にして、夫の交趾支那に於ける佛の勢力は印度の爲めに危險を增し、太西洋沿岸に於ける英の勢力は佛國コンゴー其の他に向つて非常の恐怖と與へ、其他近時安南遲羅及び支那等に於ける出來事の如き一に之を證して餘あるに非ずや、チヤールス、ヂルク氏曾て謂へらく、將來世界に對そる英國の競爭者は露國ならんと、然り露國は英國先天的の仇敵として待つべきも、而も阪本に於ける光秀は信長を弑せんとする梟敵なるを忘るべからず、何となれば英若し露と釁と啓くの時は即ち佛と戰ふの日にして、夫の英人が印度を奪略せしは佛の遺憾骨髓に徹する所、若し夫れ英と擊んが爲めにはアルサス、ローレ

蘇士市街の光景

ンスの恨を忘れて獨に結ばんとするは夙に識者の觀破する所なり、之と歷史の上に照らし之を利益の上に察し更に之を感情の點に考ふるも兩國が氷炭相容れざるは自然の勢にして目下埃及幷に亞非利加內地に於ける衝突は寧ろ當然の理由のみ。

眼を轉じて英國を顧みれば亞細亞唯一の寶庫たる印度は今や北方露の爲めに狙はれ南方佛の爲めに危險を加へて頗る不安の狀を呈せり、英人曾て謂へらく印度政府と亞富汗王との同盟及び其西北境軍事上の要地たるギルギットの防備整頓は優に亞富汗を掠めベシヂエーと奪ひ今と、然るに何ぞ圖らん、露國は既に亞富汗より百五十年前までは其距離遠く三千七百哩なりしも目下最遠の所にて僅に百五十哩ならんとは況んや曾て超ゆべからずと思ひしヒマラヤの天險中露人の侵入すべき數條の通路を發見したるに於てとや、是れ

現今英國が其防備に汲々たると同時に埃及と奪ひ運河を掠め、因て以て印度と本國との航海を堅めんとする所以に非ざるなき哉。

版圖の宏大は未だ以て國家の勢力となすに足らず英國過大の版圖は偶々以て其倒るゝ所以なるを知らざるべからずとは去る明治廿七年の頃ゴールドウヰン、スミス氏が其著書に於て論破せし所、實に英國當時の國勢を穿ち得て其要を得たるものと謂ふべし、觀よ今や英國は版圖の宏大に依て過重の責任を感ずると共に新に得る所を望まざるは勿論の事なりと雖も、而も印度帝國防備の爲めに萬艱を排して之が航通を擔保する埃及と得んとするは掩ふべからざる事實なり、蓋し蘇士運河は一千八百八十七年英佛兩國の委員が巴理に會して調印せし以來、万國中立地として交戰國軍艦の通航を許さゞるは今日歐洲列國の默認する所なり、されば英國が埃及と得んとするは運河航通の自由と得んが

爲めなり運河航通の自由を得るは印度防禦の目的に於て成功するものなればなり、假令ヂブラルタルの海峽を扼しマルタに雄鎭を置くも運河の航通自由ならずんば東洋に於ける英の領地は未だ以て堅固なりと謂ふべからず、若し夫れ喜望峯を迂回せんか、運河の航通に比し三十六日を增し濠洲及び暁香坡の艦隊を呼び寄せるも是れ亦多くの時日を費して到底緩急、事に處するの策に非ざる也、故に英が畢生の力を尽して埃及を得んと欲し、假令之を獲ざるも其內政に干渉して東洋防備の地盤を作らんとするは益し其國勢に於て已むを得ざるの策なる歟、果して然らば埃及問題は將來如何に終局をべきや、中原の鹿誰れの手に落ちん英之を得る耶、佛之を得る耶、非耶、余輩請ふ之が結論を爲さん。

蘇士運河の景

此日蘇士灣を後にして直に運河に入る、運河は蘇士よりポートセッドに到る、北より南に及んで其距離九十九哩、內十七哩間は幅三百二十七呎、二十二哩間は幅九十六呎にして深さ二十六呎なりとぞ、之を形容すれば一帶の狹流沙漠の中央を貫さて碧水染むるが如く、兩岸波堤と作るに石或は柵を以てし堤下樹木を植ゑて土留となす、途中四個の湖水ありて最大なるものをモンザー湖と云ひポートセッドの入口にあり、其次なるをグレート、ビッター湖と稱して蘇士の近邊に在ㇾ、鐵道其岸に沿ふてポートセッドに通ず、途中十一個の停車場ありて郵便及び旅客の昇降に便ㇾ、又河側適宜の所に信號標を設け東西滊船の遭遇するときは球標を揭げて進航若くは投錨の合圖となす、中流亦た幾

多の浮標ありて常に水の深淺を測量する等其注意の到れり尽せると觀る、之を要するに年々歳々數千の大船巨舶が此所を通過するも未だ曾て其坐床若くは衝突したるを聞かざるは畢竟水先案内者の熟練與つて大に力あるは勿論なりと雖も、抑々亦た運河の組織完全にして其規摸の宏大なるに歸せずんばあらず、而して両岸の土沙堆く海底極めて低きを以て船舶の運河に入るときは船体深く地中に沒し上甲板に出るに非ざれば四圍の風光を眺むる能はず、其狀恰も長濱河に於ける切拔の長大なるものと見れば大差なからん歟、切拔は巨巖大石を開鑿して自然の通路を作れるも運河は其両岸悉く沙漠なるを以て風雨のある毎に泥沙と河心に運ぶより常に數十の浚渫船を浮べて之を浚渫す、運河會社の經濟上莫大の費用を占むるものは實に此浚渫器なりと謂ふ。

本船の運河にて出遇ひし汽船は六隻にして以太利佛蘭西獨逸西班牙英

國等の國旗を掲ぐ、外に英船一隻の兵士を搭載して亞丁に赴くと見受けぬ、而して彼等の止まると四度本船の止ると三回なりき、屈指すれば本年五月上旬土佐丸の始めて此所を通過するや、疾風濛々沙塵を捲いて所謂「サンデーストーム」を起し、四顧暗澹として喉乾き呼吸苦しく、滿目荒涼たる原頭月黑く風暖く温度常に九十度以上に昇りしが、今回は亞丁紅海に比して寧ろ涼氣を感じ秋風爽颯征人羈客の衣を拂ひしは洵に無上の幸ひにして此炎陽無比の沙漠にも秋夏の區別あるとこゝとは知られたり、甲板に立つて四方を眺むれば右は渺々たる亞拉比亞の廣原、左は茫々たる亞非利加の沙漠、眼界の達する所杳渺として極りなく、一の沈默一の寂寞を破るものなし、雲耶山耶沙耶土耶、塵烟濛々として天に連る所地平線上微かに幾群の黑影を認むるもの、是れぞ例の三々伍々隊をなして旅行するとは知られたり、堤下土を運び石

を砕き玉なす汗を流して働きつゝある亞非利加土人の顔は太陽に反射して其色黒鐵の如く、若し此奴等を携へ歸りて觀世物に出せば好き錢儲けの種ならん抔語り合ひしは時に取ての一興なりき、船上より空瓶又は麵包の一片を投與ふれば彼等は先を爭ふて奇妙の聲を發し忽ち水中に躍り込みて之を撈む、其有樣恰も水に泳ぐ水牛に似たりとや謂はん、途中間々煉瓦の壯屋を搆へて此所に住める歐洲人なきにしも非ざれど荒原沙漠の住居は流石に斷腸の思ひに堪へ兼ねてや顏色憔悴形容枯槁して最とも憐れに見受けられぬ船は運河會社の規則に隨ひ一時間五哩の速力を以て走れども四圍の風光依然として變化なく、見上げ見下す所何れも沙漠に非るなく殆んど閉口と極めたり、既にして漸く大小二個のビッター湖と瞥見し、チムサー湖に出れば湖面疊の如く碧潭澄清にして翠色頓に生氣を添へ眼界始めて一變す、眞に是れ万綠叢中紅一點とも云ふべき也、勿論之を平時に見れば尋常一抹の湖水、幽致閑雅の情絶えて見るべからずと雖も、沙漠の眺めに飽き果てぬる我々旅客の身に取りては亦た一段の興奮劑とも謂ふべし、湖邊蒼樹婆娑として斜岸を回る所近く一條の街路を見認むるは是れぞ即ちイスメリヤと稱する一小市街にして重に夜間碇泊の處なりとぞ、此地僅に沙漠原頭の一孤村に過ぎざるも之と歷史に繹ぬれば今より九十八年の昔、夫の一世奈翁が威權赫々歐洲の山河を震動し懸軍万里埃及に攻入りし時親から兵を督して行軍し、遙にナイル河邊にアフーカー灣を望んで終天の恨を殘せし所、將又た今を距る十四年前埃及末路の名士アラビーパシャが兵を擧げし時四万の軍勢が西より東より舳艫相啣んで推寄せ來り燒が如き暑熱を犯して上陸せしは實に此小市街なりき、されど圖らざりき盖世の英雄奈翁もウオートルローの役一敗地に塗れ憐れや訪

ふ人もなき一孤島セントヘレナに遠謫せられて幽囚無聊の中に死せんとは、更に圖らざりき豪邁不屈のアラビー、パシヤもテルエルケーバーの一戰に見事打負けて無殘や錫蘭島の山中に楚囚の身とならんとは所も同じイスメリヤ而も二人の英雄豪傑が胸中に畫きし雄圖空しく蹉跌して末路を絕海孤島の中に終らんとす噫、彼等の此所に到れるは果して天耶命耶、詩伯バイロン謳ふて曰く『蒼茫たるアマゾンの野は依然として千歳の觀を存すれども、盛を天下に競ひしアゼンの宮闕は消えて跡なし』と、若夫れ歷史の案内に依りて杖をベンテ、リコン山に曳かんか、渺杳たる原頭秋風颯として懷古の情を吹き、汲斯の殘壘點々として古今興亡の跡永く羈人の恨を惹くもの多し、嗟し陵元陵下春風の怨は萬古志士の血淚を催し、南山行宮の夢は千歲の下尙ほ丈夫鐵石の心を傷むるに非ずや、彼のイスメリヤ城頭湖月高く沙漠を照し

殘墳古壘轉た寂寞たる處、面のあたり英雄の末路を追想すれば誰か亦俯仰今昔の感なからんや、況んや羅馬の金城消えて跡なくソロモンの榮華去て夢となり、サーキサズの績歷山の勳沙上一痕の影宮女一夜の契に過ぎず、觀し去り觀し來れば英雄の窮達浮沈豈夫れ偶然ならんや舷頭手を拱て瞑想默思すれば當年活劇の狀歷々として胸裏に浮び、硝煙彈雨天に漲つて山河震動するに驚て目を開けば、チムサー湖上の風は最と〻冷かに滿目荒涼として轉た征人の恨を惹くと深矣。

『勿論世界は汝が家なり』と、峨々たる亞非利加の禿峯を望んでは誰か積雪千秋に垂る東海の靈山を想はざらん、寂寥たる沙漠の秋色を眺めては唯か亦故園万疊の錦を思はざらん、況んや今月今日は我皇天長の佳節なるに於てをや、一杯の葡萄酒に目出度遙拜の式を擧ぐれば故山の風光宛として眼前に映ずれども、故郷遙に雲遠矣、嗚呼天涯万里孤

客の情誰と共に語んや、勿謂『人間到處有青山』と、夫の春畝翁が『一年身爲他鄉客、万里夢歸故國家』の一絕は北風に嘶く胡馬の情を諷ふものに非ずや、又た鉄血宰相ビスマルクが『余の夢は常に故國の山水に逍遥す』と曰ひしは南枝に巢ふ越鳥の消息を洩せるものに非ずや、余や關山万里國を去て已に五旬、身は今蘇士運河の中央にあり、月色朦朧として沙漠を照すの夕、孤雁悲鳴を擧て東に飛び去るの時誰か亦懷郷望里の情起らざらんや、況んや余か伴生の理想は今宵万里を隔てゝ知已諸君が上に落つるに於てをや。

長風万里幾度か怒濤の音に夢を破りし此航海も今や運河の中央に差掛り、紅日沙漠に沒して夜色暗淡たり、是に於て船首に一大放光電氣器を備へ一千二百メートルの前程を照らして進み、瞬く間に運河を通過し翌四日午前四時恙なくポートセッド港に到着なしぬ。

蘇士運河の沿革　（其一）

蘇士運河は太古より既に地峽と開鑿して殆んど現今の路を往來したるが如しと雖も記錄の徵そべきなきを以て計畫者の何人なるを知る能はず、多分紀元前六百年の頃夫の「ピラミツト」を建設せし有名なる埃及王ならんとの說あり、然れども歲月の經過するに隨ひ泥濘土砂の爲め水路充塞して全く其用をなさゝるに至りぬ、而して同七百六十七年再びツラヂヤン王に據りて開鑿されたりと雖も、其規模狹少にして僅に扁舟漁船の通航するに過ぎざりしが、其後奈破翁一世全盛の時に當り印度攻撃の爲め運河の規模を擴張し地中海及び紅海に連接して軍事上の目的に供せんとせしが果さずして止みぬ、爾來星移り物變るも一人の起て此大工事を計畫する者なく歐亞航通の船舶は悉く喜望峯を迂回

せざるべからざりしが、斯に十九世紀の學史上千歲不滅の芳名を轟かしたる一大偉人あり、赤手揮て此偉業を奏し終に完全なる今日の蘇士運河を觀るに至れり、抑々此偉人を誰とかなす、即ち佛國のフアルヂナンド、ラセップ氏其人なりとそ。

今やラセップ氏は蘇士運河の成功者として將た又パナマ運河の計畫者として英名一世を傾け、夫のワット、ステヘンソン、ファラデー、ポイート、ストーン等の諸士と共に千秋萬古工學史上の一大紀念碑として吾人の忘るべからざるは勿論なりと雖も、而も其計畫の當時に溯れば其身邊には實に千萬無量の困難なくんばあらず、假令サーヨンホークショー、大佐シェスチー、萬國會議員の一人たるレンデル、マクリーン及びマンビー等の人々は何れも工學上より其成工を論じて遙に聲援を與へたりと雖も、當時曉名一世を傾け武權赫々歐洲に震ひし英國の宰相パーマルストン卿は印度の防禦に害ありとして大に之に反對せしより英國の資本家及び技師等は一切此事業に向て投資翼贊せざるとなれり、然れども不撓不屈のラセップ氏は此障礙に遇ふて何ぞ躊躇そべき、鍥より堅き自己の所信は埃及王に說くに運河の成功必すべく開鑿の結果は埃及國の繁榮を增進そべきを以てし、更に佛國民に說き技師を說き受負者を說き勞働者を說けり、渠の熱心なる演述は果然埃及王の心を動かして漸く其基本金の五分の二を出すこととなれり、而して是と同時に殘額は大陸の各國即ち佛、墺、露土就中佛國民に依て多く出金せられたり、是に於てか一千八百五十四年運河會社を設立し其後六ヶ年を經て工事に着手し一千八百六十九年八月廿九日其完成を告ぐると同時に飛脚船の航通に故障なき事を決定し盛大なる開業式を擧行せり、時に維れ我明治二年なりとそ、運河の開鑿成功そるや歐亞兩

大陸を密接して貿易上至大の利益を與へしのみならず、又た其造船業に向ても非常の影響を及ぼせり、從來歐亞交通の汽船は遠く喜望峯を迂回せしを以て其吃水に制限なかりしも運河通航の汽船は必らず其深さに適應したるものならざる可からず、是れ今日と雖も各國軍艦及び商船が運河の規模に依て其船体を左右せらるゝ所なり、現に我富士艦の如きも吃水深きが爲め或は喜望峯を迂回せざる可からざるやに聞く喜望峯を迂回すると運河を通航するやは其航程に於て幾千の差ある、左表に就て之を見るべし。

	蘇士運河經過	喜望峯通航	短縮
龍動孟買間	六、二七四哩	一〇、七一九哩	四、四四五哩
同カルカッタ間	七、九七四	一一、六〇六	三、六三二
同香港間	九、七三〇	一三、一四九	三、四一九
同上海間	一〇、四三六	一三、八〇五	三、三三九
同橫濱間	一一、六五一	一四、四九七	二、八四四

由是觀之運河の開通は啻に其距離時日に於て利する所あるのみならず亦石炭に於て大に利する所なくんばあらず、何となれば喜望峯を迂回すれば多量の石炭を搭載せざる可からざるを以て荷物の容積に於て大に減ずる所あるは明白なる事實なり、今若し一時間十哩の汽船にて橫濱より蘇士を經由して龍動に到るものとすれば僅に四十八日、香港よりすれば四十日、上海よりすれば四十三日なりと雖も、喜望峯を迂回すれば少くとも之に十二日乃至十四日と加へざる可からず、而して一日の石炭消費高を假に四十噸とすれば五百五十噸の石炭を用意して啻に其船腹を塞ぐのみならず亦た五千圓内外の石炭代價と支拂はざる可からず、是れ即ち運河開鑿以來各國の船舶多少不廉の運河料と支拂ふ

にも拘はらず悉く路を茲處に執る所以なり、況んや荷物の運賃は運搬の遲速に依り非常に高低あると印度の如き軍事上の防備に關する迂回の航路に於てをや。

※　※　※

●蘇士運河の沿革　（其二）

斯の如く流石大工事の運河も創業以來三ケ年の間は毫も其配當なきは固より、却て收支相償はずして社運非常の困難を極め、終に一千八百七十一年に至り八分利付の社債を起して一時の窮厄を救ふの已むを得ざるに至りぬ、蓋し六十九年より七十一年に至る三ケ年間は登簿噸數一噸に付十法（凡我參圓八拾錢）宛の過料を徵收せしが其翌年より總噸數に賦課する事となせり、畢竟するに當時の荷物船は實際其噸數よりも多量の貨物を搭載せしを以て運河會社は夙に通過料を引揚げ四割若くは五六割を增加せんとの計畫ありし際なりしかば、土耳其政府の許可を名とし斷然同七十二年より總噸數一噸に付十法宛の稅金を徵收する事に改正せり、然るに此噸稅なるや船主に取りては輕少ならざる負擔なるを以て、忽ち航運社會に沸騰を惹起し運河會社に反對する者尠からず、就中英國の船主は政府に迫りて英海の海上貿易、英國の國旗英國の利益に保護せられんとを請願し、又英國の「エムエム」會社及び其他の滊船會社は何れも同盟して激しく運河會社の改正稅率に反對を試みたり。

各國の船舶所有者が極力ラセップ氏の立案に反對したる結果は、翌七十三年十一月土都コンスタンチノーブルに於て万國會議と開き其稅率を定むる事となりしが、結局從來の登簿噸數十法に三法を加へて都合

十三法となし、尚は漸次船舶の通航增加するに隨ひ次第に其稅率を遞減する事となれり、然るに當時ラセップ氏は之を以て滿足する能はず是非とも總噸數に賦課するとにせんとし大に抗議する所ありしが、大勢の向ふ所如何ともする能はず、自己の立案廢棄せらるゝを見るや憤懣の情に堪へず、翌年四月運河の閉鎖を試みしも僅に四日間にして埃及政府の脅迫に依り遂に此割合を採用する事となれり、然るに爾後歐亞貿易の盛んなるに隨ひ運河通航の滊船漸次に增加して會社の前途多望と呈し、其利益配當の如き七十年に發行したる五分利札は七十三年に於ては現金を以て支拂はれ、同年以後の配當金も漸次增加して今や殆んど其絕頂に達せり、左に一株五百法(凡我百九拾圓)に對する昨年迄の配當金を擧げんに

一千八百七十七年　二六、八八〇　拾圓貳拾壹錢

一千八百八十年　三二、九八七　拾貳圓五拾四錢
一千八百八十四年　四六、八八六　拾七圓八拾貳錢
一千八百八十七年　八七、二五二　參拾參圓拾六錢
一千八百九十四年　九五、五〇〇　參拾七圓五拾錢
一千八百九十五年　七四、五〇〇　貳拾八圓參拾壹錢

由是觀之、創業の當時三ヶ年は其配當皆無なりしも七十五年に至ては已に五分內外の配當をなし、其より引續き增加して一割となり、尚ほ近年は一割七分乃至一割九分まで暴騰するに至れり、英國の如き金利最低廉なる所(通例二分五厘乃至三分)にて斯の如き配當をなす會社の利益推して知るべし、是れ蘇士運河會社が世界第一の株式會社なると同時に、其株式の益々暴騰し殆んど底止する所なきに至りしは無理ならぬ次第と謂ふべし

今左に千八百七十一年より同九十五年に至る、既往二十五年間に於ける運河通航瀛船の統計を擧げんに

年號	船數	登簿噸數
一八七一年	七六五隻	七六一、四六七噸
一八七二	一、〇八三	一、一六〇、七四三
一八七三	一、一七三	一、三六七、七六七
一八七四	一、二六四	一、六三一、六五〇
一八七五	一、四九四	二、〇〇九、九八四
一八七六	一、四五七	二、〇九六、七七一
一八七七	一、六六三	二、三五五、四四七
一八七八	一、五九三	二、二六九、六七八

一八七九	一、四七七	二、二六三、三三二
一八八〇	二、〇二六	三、〇五七、四二一
一八八一	二、七二七	四、一三六、七七九
一八八二	三、一九八	五、〇七四、八〇八
一八八三	三、三〇七	五、七七五、八六一
一八八四	三、二八四	五、八七一、五〇〇
一八八五	三、六二四	六、三三五 七五二
一八八六	三、一〇〇	五、七六七、六五五
一八八七	三、一三七	五、九〇三、〇二四
一八八八	三、四四〇	六、六四〇、八三四
一八八九	三、四二五	六、七八三、一八七
一八九〇	三、三八九	六、八九〇、〇九四

一八九一	四、二〇七	八、六九八、七七七
一八九二	三、五五九	七、七一二、〇二八
一八九三	三、三四一	七、六五九、〇五九
一八九四	三、三五二	八、〇三九、一七五
一八九五	三、四三四	八、四四八、三八三

右表に據れば運河通航瀛船の年々增加しつゝあるは明白なる事實にして、殊に近年著しく其發達を來せるものは船体の大さにありとそ、昨年公布したる運河會社の報告に據れば、現時運河の深さは二十五呎七吋にして九十二年中通過せる瀛船の內最深の喫水を有そるもの即ち二十四呎六吋の瀛船は僅に百二十七隻に過ぎざりしが、九十三年には百六十四隻となり、九十四年には百七十二隻となれりと云ふ、之と百分比例にすれば九十一年には三分二厘、九十二年には五分五厘七毛、九十三年には四分九厘一毛、九十四年には五分一厘となる、是れ明かに世界航海業の大勢は益々大船巨舶の製造に向つて發達しつゝあるを知るに足るべし、昨年運河通航の瀛船は前表既に示そが如くにして之と一昨年に比すれば其船數に於て八十二隻、噸數に於て四十一万九千二百八噸、收入に於ては八千四百二十九万九千法（我百六十三万三千六百二十圓）の增加を見るに至れり、然るに一昨年は一株に付三十七圓五錢を配當し、昨年は收入の大なりしにも拘はらず二十八圓三十一錢を配當せし所以のものは、蓋し補助金の減少、浚水機の買入及び社債償還等の爲め以上の配當をなすとゝなりしが、尙は實際に於ては三十五圓十五錢を配當し得る筈なりしも、純益の三分と積立て運河擴張の使途に供せんが爲めとは知られたり、而して昨年通過の船客は二十一万六千九百三十八人（一人付十法と課そ）にして、夜中通航の瀛船は三

千二百六十六隻なりとす、又滊船の運河通航平均時間は十六時間と十八分にして昨年に比し二十三分と短縮せりと謂ふ、今左に昨年通過せし滊船の數並に其國籍を區別すれば

英國	二、二一八隻	獨逸	三一四隻
佛國	二七八隻	伊國	七八隻
和蘭	一九二隻	墺國	七二隻
諾威	五七隻	露國	三九隻
土耳其	三六隻	西班牙	三三隻
支那	二隻	日本	二隻
其他	一五隻		

にして英國が東洋に對し貿易上最上の位置を占むるは勿論、其海上權一の如何に膨脹せるかを知るに於て餘りありと謂ふべし、且又運河會社の報告に依れば、昨年は歐洲諸國より東洋に向け多量の貨物を輸出したるも、東洋より歐洲に輸入したる貨物は極めて少量なるが如し、何んとなれば其復航の各船は何れも其吃水の淺ければなり云々、以て其一端を窺ふに足るべし。

* * * * *

● 運河會社の資本金。

目下運河會社の資本金は千六百八十六万七千磅（凡そ我一億六千八百六十七万圓）にして內株券八百万磅社債八百八十六万七千磅なりとす而して其中十七万六千六百二株即ち全株券の殆んど半數は英國政府の所有に屬するものなり、運河開鑿の當時宰相巴郷は痛く此擧に反對して一枚の株券だも所有せざりしが、其後千八百七十六年に到り、宰相ビーコンスフヰールドは夫の埃及がアビシニヤ戰爭並に內亂に由りて

國力の非常に疲弊せるを見濟し、政治上の必要即ち東洋殖民地防備の爲め埃及政府より其株券を購求せんとせり、其價は三百九十七万六千磅なりしが、之に對して年一割二分の利子を拂ひ、尚はロスチヤイルド氏に支拂ひたる手數料等と合算する時は無慮四百七万六千五百六十五磅の巨額に昇れる上、英國政府が現時に於ても尚は益々之を購買しつゝあるは夙に世人の知れる所なり。

斯の如き資金、斯の如き組織の下に運河は漸次發達して非常の旺盛を極むるに至りしが、最初は滊船に向て夜航を許さゞりしより僅々九十九哩の距離なるにも拘はらず、之が通過には平均三十六時間を要せり然るに一千八百八十六年を以て電燈と具備する滊船には河幅廣き部分を限り夜航を許せしより十六時間と短縮するに至れり、而して其翌年三月一日再び運河會社の全長に夜航を許可せるを以て、更に二十時間を短縮して目下は十六時間内外にて全く通航するを得る事となりぬ、今左に運河の規則及び税律の摘要を抄錄して歐洲航行の滊船が如何なる税金と支拂はざる可らざるかを明にし、聊か海運業者の參考に資せんとす。

着港　ポートセッド若くは蘇士に投錨の後、船長は運河事務所に出頭して入港屆をなし、通過に要する諸税を納め且つ左の箇條を報告すべし

（一）船名及其所屬國名
（二）水脚（ブヲフト、ヲブ、ウヲター）
（三）船長、所有者及雇入人の姓名（但雇船の場合）
（四）仕出及仕向地名
（五）船客目錄に記載の船客員數

（六）乘組員數（雇入証書記載面の通）

（七）特別運河證即一千八百七十三年「コンスタンチノープル」に於て万國噸量委員の規定せる規則に適合せる船積證書に記載の容積（但ダニューブ）才量を以て測量せし登簿噸數

水脚　蘇士運河は水脚七「メートル」八十「センチメートル」「即廿五呎七吋」以下の船舶を航通せしむるに適し、其運轉は各船自己の蒸滊を以てし或は曳船を用ゆるも妨なしとす。

速力　最大速力を一時間十「キロメートル」即五海浬三分の一なりとす

水先案内人　總噸數百噸以上の船舶は、必ず運河會社の水先人を使用すべしと云へども、本船の管理及運動より生ずる凡ての變災は該船長其責に任ずべし、但運河通航中の水先料は賦課せざるものとす

準備　運河通航に先ち帆扛を斜に前方に牽緊し、舷外に懸拘せる端艇

は之を船内に取入れ、船首の錨は両舷共に投錨の準備となし、船尾に堅固なる小錨と鋼索を具へ、水先人の要求に應じて繫留の用に供すべし、又通航中は端艇一艘を卸し之に鋼索を搭載して運河の両側に並列せる繫船杭に繫くの用に供すべし。

夜中通航　電燈に因て夜中通航をするものは追て何分の命令ある迄左の條約となせる滊船のみに限る。

夜中運河の通航をなさんとする滊船は先づポートセイド若くは蘇士に於ける會社の管理人に必要器具の完備せることを承諾せしめざるべからず即（第一）船首に放光電氣機を具有し、光力は船前千二百「メートル」に達し、放光電氣機は水面に接近して裝置せると得ること（第二）上甲板より高き所に吊せる一基の電氣は其覆蓋を有し、光力は周圍二百「メートル」と照輝するに足るもの

運河會社の資本金

會社の管理人は前記の器具を檢し、社則に適應するものなるや否や又該器具の備に依て夜中運河の航行に不便と來すとなきや否やを判定し而して後許可を與ふ（尤も當時は貸電燈の設けありて、電燈の備付なき瀆船と雖も夜中航行に差支なし）電燈の備なき瀆船にして已むと得ざる事情より夜航を許可するは極めて破格の事にして此時船長は全然たる責任を負擔し、其旨書面に認め差出さゞるべからず

噸稅　噸稅は一噸に付九法にして、特別蘇士運河證書を所有せざる船舶は登簿噸數に依りて賦課そ。

特別蘇士運河証　特別蘇士運河証書を所有せざる船舶は登簿噸數不明に依り、會社の管理人に於て測量と遂げ、其噸數に應じて噸稅を課し該船本國の管理廳より下附の特別新証書と持參する迄之を變更することなし。

空船　空船は追て命令を發布そる迄一噸に付二法宛の噸數を免除すと雖も、郵便物若くは船客と搭載し或は些少にても船中に石炭若くは商品を積載せるものは空船と認めず。

船客稅　十二歲以上の船客は一人に付十法宛、三十歲より十二歲迄は其半額と賦課す。

曳船料　四百噸以上の瀆船にして自已の進航機を用ひ或は必要に應じて之を使用するの契約と以てそれば一噸に付二法宛、自已の進航機と使用せざる瀆船は四百噸に付千二百法を課し、以上一噸を加ふる毎に二法半と增すべし、曳船の隨伴を望む瀆船は一等曳船は一日に付金千二百法、二等曳船は一日に付金八百法と仕拂ふべしと雖も、運河の途中にて解雇そる時は各其半額を減ずべし。

坐床　運河通航中坐床する船舶二瀆船交互の衝突に起因するに非され

ば、會社の費用を以て離床せしむべしと雖も、本船に於ても亦出來得る丈の補助を與ふべきものとす。

運河に關する規則の重なるものは以上列記の通りにして各國船の之を遵奉すべきは固より論を俟たず、故に歐洲航行の汽船にして假に其噸數を三千八百二十噸とすれば往復此地に於て左の金額を支拂はざるべからず

一金六万八千七百七十三法五十參　特別運河証に對する運河稅
一金二千三百一法卅參　蘇士燈臺料
一金二十八法　蘇士健康證書料
一金五法　同出港手數料
一金八法　ポートセッド稅關手數料
一金十法　同出港手數料
一金廿五法　同碇繫浮標料
一金三十九法　同健康證書料
一金十二法五十參　同英國領事證書裏書料
一金十二法　同白耳義領事證書裏書料

合計金七万千二百十四法三十九參

一法を凡我卅八錢として換算すれば二万八千六百六十一圓四十七錢の巨額に達す、之に石炭給料雜品各國燈臺料其他の諸雜費を合算すれば少くとも十一万圓內外の經費は入るべし、是れ歐洲航路が國家的事業として政府の補助なくんば到底成り立ざる所以にして、抑亦各國の汽船會社が夫々政府より助成金を得つゝある所以ならん乎

※　※　※

蘇士運河の資本金

ポートセッド所觀

ポートセッドは埃及の東北端に位し地中海に臨める一港にして、府知事管轄の下に現時の人口は一万六千五百六十人を有する一小市街なり港はモンザー湖を挾て蘇士運河に連絡し、海水高く地盤低き、よく左右各一個の波堤を突出して狂爛怒濤の汎溢を防ぐ、是れより内を内港と稱し外を外港と云ふ、外港は千里渺茫たる地中海に連りて澄碧鏡の如く、内港は運河に通じて其深さ廿六呎、最狹の幅員僅に二十五間に過ぎず、故に滊船の到りて浮標に繫留するときは市街を眼下に瞰して全市の形影寸眸に入り、道路弘濶家屋壯麗始て歐洲風の建築物を觀るを得べし、住民の過半は埃及人亞拉比亞人土耳其人にして英佛墺伊希露獨等の人民亦多く雜居そ、然れども其商業上に立て最も勢力を有

そるものは英人にして其次は以太利人なるが如し、目下以太利人の商店に六人の日本人ありて盛んに日本雜貨を販賣す

抑々ポートセッドは其開港全く蘇士運河の開鑿に基因するものにして今より僅に三十年前に溯れば人口稀少地味磽确見る影もなき埃及沙漠の一端に過ぎざりしが、一千八百六十九年運河の開鑿完成すると共に一躍して埃及屈指の良港となり、其繁華遠くアレキサンドリヤ及びスエズを凌ぐに到れり、蓋しポートセイドは天然の地勢東西半球の中心に位するより、歐亞交通の滊船は必ず路を茲に執らざるべからず、啻に路を執らざるべからざるのみならず、石炭其他の供給は悉く茲處に仰がざるべからざるを以て、大船巨舶帆檣林立し黒煙天に漲りて晝夜歎乃の聲を絶たず、故に年々歳々市民の富を増進して益々膨脹しつゝあるは疑ふべからざる事實なり、聞く處に依れば毎年英國より輸入す

る石炭は凡三十五万噸の巨額にして、其東岸炭庫には石炭充滿して更に一個の炭山を築き、常に七八隻の滊船繋錨して盛に其陸揚しつゝあるを觀る、而して下等勞働者の如きは大概之に依て衣食するもの多きより、其積入方頗る瞬速にして一時間平均百噸なり、之を我下ノ關小樽長崎等の地に比すれば其遲速殆ど同日の論に非らず、豈驚くべきの至ならずや、而して是等の人足は重に土耳其人にして骨格逞しく力量強く、一見慄悍強暴の相恰あり。

歐亞大陸の中心に位せるポートセッドは旅客が舊世界に向て告別する最終の港たると同時に亦歐洲大陸に乘込む最初の港なり、故に此地の繁昌を知らんと欲せば蘇士運河通航滊船の數を知るを最も必要なりとす、何となれば通航滊船の多寡は此地の消長に重大の關係を有し、市民の盛衰此に因て繋がるればなり、今昨年四月より本年四月に到る一

ケ年間に運河を通航せし汽船の數を調査するに三千三百九十五隻にして、内九割五分はポートセッドに寄港して石炭及食料を搭載し、五百隻は貨物及船客を陸揚せり、且又近年の統計に依れば、ポートセッドと經由して毎年歐亞に往來する人民は無量五十万人を降らざるべしと謂ふ、今假に是等の旅客が一人二圓宛を消費するものとすれば一百万圓の巨額は單に旅客の上陸に依て得らるゝなり、況んや實際に於ては遙に是れより大なるものあるに於てをや、左れば是等の譯よりして自然に繁昌するは勿論の事なりと云へども、就中政治上及商業上に於ける勢力家が往來の途次必ず上陸するの多きは世界弘しと云へども恐らくはポートセッドの右に出づるものなかるべし、畢竟するに此地は東洋及濠洲に於ける事情を聞くに便利なると石炭搭載の爲め船内にありては不愉快と感ずると及び永き船路に疲れて陸上の空氣を吸んが爲め

自然旅客を誘引するは蓋地理上に於けるポートセッドの役徳と謂ふべし。

勿論ポートセッド夫れ自身が是等の旅客を引寄する丈の價値ある市街に非ざるは事實なりと雖も而も、千八百九十三年十二月十二日イスメリヤ、ポートセッド間の鐵道を開きて蘇士に全通せし以來は茲に一層の便利を增し、曾て不便不潔の土地として歐洲人の一顧を價せざりし此土地も俄に其面目と一新して大厦高樓甍を竝べて櫛比し殷富全土に冠たる繁榮の市街となるに至りぬ、斯の如く同港は駸々乎として日進月歩の勢を呈して非常の旺盛を極むと雖も、奈何せん天然の地質は乾燥無味の沙漠なるを以て市人日常の食物は之をサイブル若くはアレキサンドリヤに仰がざる可からず、故に其價格も頗る不廉にして細民の苦むと多きは洵に此地の一大缺點と謂ふべし、斯かる有樣なるが故清水

の如きも亦之を得ると頗る困難なれば其價も隨て廉ならず、故に市民の多數はナイル河の濁水を汲んで之を蒸溜し若くは浚漉して飲用に供すると、以て其一班を知るに足るべし。

※　※　※

※　※　※

此日本船の着港すると同時に余等市中見物の爲め上陸したり、目下此地の氣候は一年中最良の時にして暑からず寒からず、恰も我四五月頃の陽氣と相似たり、故に若し此地をして故山ならしめば春風駘蕩として櫻花は雲耶雪耶と疑はしめ、美人花に狂へば才子水に棹し、淸遊雅樂恍として興尽きざるべきも、由來淸境幽土に乏しき万里海外の天況して沙漠原頭の一市街、樹木枯れて土赤く、綠草蔫して風塵を捲き、滿眼の風光寂寞として一の耳目を娛ましむるものなし、特に其蚊蠅の

蝟集して往々人を刺すには殆んど閉口なしぬ、市内鐵道馬車を設けて往來を便にすれども其規摸狹少にして東京の圓太郎馬車若くは我伊野行の箱馬車に似たりとや云はん、市街の中央に公園あれども是亦た規摸狹隘なる上不潔にして敢て觀るに足らず、開く所に據れば此地より

カイロ迄は鐵道の便に依り僅に八時間にして達するなり。

カイロは流石埃及國の首府として其名所古跡に富めるは前信に述べたるが如くなるも、余等出帆の都合にて出遊する能はざりしは洵に遺憾の次第なりき、市中に「イースタン、エキス、チエンヂ」と稱する取引所あり、白堊層樓天を摩して、ポートセッド第一の建物なり、此所に至れば工藝品の見本及び其價格付等ありて大に商業上の智識を得ると少からず、又以太利人の店に至れば日本の陶器漆器其他種々の骨董品ありて恰も故山の店頭に遊べるが如き觀あり、況んや言語衣食を同うする六人の日本人あるに於てをや、聞く所に據れば此地に於ける日本雜貨の賣行は頗る好況にして就中杖、扇、團扇、ハンカチーフ、寫眞等の安物は最も能く土人の嗜好に適し前途甚だ有望なりと謂ふ、現に此一小店が六人の日本人を使用し尚其繁忙を極め居るを觀ニ、以て其一端を知るに足るべき歟。

ポートセッドの所觀

ポートセッドの花となり飾となりて其壯觀を添ふるものは汽船なり、ポートセッドの肉となり血となりて其富を增すものは石炭なり、若夫れ此二者を引去らばポートセッドは宛然なる埃及沙漠の一荒村のみ、海に獲漁の利なく陸に採取の資なき荒原沙頭の一漁村のみ、然りと雖も此荒村を變じて一個繁榮の市街となし、此漁村を變じて全土屈指の港灣となし、波堤を築き港内を浚へ運河に連絡する等總て人爲的工作に依りて以て今日の盛大を來せる其功業成蹟に到りては公輩の大に感

嘆する所なると同時に其裏面を觀察すれば一種謂ふべからざる腐敗の空氣全市に充滿せるを認むるは此地の爲め轉た歎息に堪へざる所なり凡ろ何れの國何れの地たるを問はず、開港場の一般に淫風盛んにして風紀の廢頽せるは今更余輩の言を俟たざる所なりと雖も就中ポートセッヅドの如きは其最も太甚しきもの〻謂はざる可らず、觀よ國際上の缺點たる公娼は無きも幾多の婦女が公然淫を鬻ぎて第二の花街を作り、盛粧美服一見窈窕たる淑女の風を粧へども一皮剝げば總て是れ妖婦魔女の變化なるに非ずや、假令法律上之を禁ずるとは云へ、其は全く有名無實にして店内無數の春畫を掲げ公然之を販賣するを見れば如何に其風紀の亂れたるを證するに非ずや、曲枝に曲影あるは免れざる所、埃及亞拉比亞土耳其等の如き未開婦人の醜態は暫く之を論外に措くも、夫の文明を以て誇り開化を以て任ずる歐洲の婦女子にして穢猥不潔見るに忍びざる裸体醜狀を暴露し恬として恥るなきは實に言語同斷の始末なりと謂はざる可からず、春畫尚は忍ぶべしとするも奈何せん〇〇〇〇一見人をして嘔吐せしむるのみならず、中には堂々たる紳士紳商の面影を認むると云ふに至ては豈咄々怪事の至りならずや、由來歐洲人は道德倫理の發達を以て誇る、渠等此醜狀に對し果して何等の顏色かある、若夫れ渠等にして是亦た一個の美術と謂はゞ余輩復た何をか謂はんや。

畢竟するに、此地に於て斯の如く風紀の亂るゝ所以のものは、畢竟警察取締向の不行屆なるに依ると無論の事なりと云へども、抑々亦幾多の歐洲婦人が是等の賤業に依て衣食し、此地警察權の範圍外にあるも確に其一因として數へざるべからず、若夫れ遠洋萬里の旅に疲れたる旅客が翠帳紅閨の中一夢を貪るの瞬間は何ぞ圖らん背後に人あつて之

と撮影するの時なるを、豈驚くべきの至ならずや、今や我國航路を歐洲に開き十二隻の滊船濤を蹴立て茲を通過し、隨て我國人士の茲處に上陸するもの日に多きを加へんとす、若し誤て渠等の手中に陷り其醜狀を暴らさゞが如き事あらば實に我同胞の一大恥辱なりと謂はざるべからず、固より品行方正の我國人士に在ては斯の如き憂は萬々之れ無かるべきも、而も他日千慮の一失なからんことを期し、敢て我同胞の注意を仰ぐ所以のものは余輩國を愛そる一片の婆心なり、願くは余輩の憂をして杞人の憂たらしめよ。

抑々熱帶地方の常として人民一般に春信の期早く隨て自然淫遊惰の風盛に行はるゝは洵に是非もなき次第にて、獨り此地に向て攻擊を加ふるは聊か酷論の嫌なき能はずと云へども、而も上の好む所下之より甚しきはなし、觀上埃及現時の王として夙に海外に遊學し文明の空氣

と吸ひ文明の敎育を受け前途有望の帝王として上下の譽望を博するアバスパシヤ其人は一昨年二月十九日イクバルハムヂと稱する一奴隷の娘と結婚したるに非らずや、是れ恐くは世界に例なき前代未聞の事ならん由來花月の艷間水天の情話多くはカイルー後宮の邊より洩るゝと觀ればポートセッド今日の狀態寧ろ怪むに足らんや、吁埃及が今日の國運に陷り未だ亡國の覇絆を脫する能はざるは豈夫れ偶然ならんや、

今や拔錨に臨みポートセッドを顧れば、万燈の影江水に映じて市街頗る壯觀を極むるとも淫風妖氣滿々として街路を鎖し、西に東に縹郎魔婦の徘徊するを觀るは、此地の爲め轉た痛嘆の至に堪ず、吁ポートセッドの前途も亦憐むべき哉終に臨で附言せ、余輩元來男女の秘密を摘發し其卑況を逃ぶるは頗る良心に安せざる所なるも奈何せん此地に上陸すれば、妖雲魔氣の市街に滿つるより目に觀耳に聞かさらんとする

ポートセッドの所觀

も到底得可らず故にポートセッドの事狀を記述するに當ん、自然筆の
隻路に走りしは實際已むと得ざる次第にて、只管讀者諸君に向つて恐
縮の至りに堪へさる也、併しながら歐洲の婦人を以て一も二もなく婦
道の堅固なるものと考へ叨に西尊東卑の謬見と持する輩に向て頂門の
一針となるを得ば、余輩の望み足る矣、他の毀譽褒貶余輩に於て何か
あらん。何かあらん。

※　※　※　※　※　※　※

ナイル河口の古跡を望んで

英雄の末路を吊ふ

日月匆々流水の如く、國を去て已に五十有五日、爾來支印両洋の濤を
蹴立て西に駛ると茲に八、八三五哩、今や弦月灣頭を照らして影暁潮を

掠むるの時、市街の夜色を望で胸中無限の感慨を惹起すの際、滊笛一
聲黒煙を後に殘してポートセッドを辭しぬ、海岸に沿ふて進む凡ろ四
十哩、午後八時二十五分の頃ひナイル河口のダメエダ燈臺を左舷凡ろ
七哩に望む、此邊沙漠平原渺々として極目涯りなく、只だ往々殘壘小
堡の跡を觀る而已、開說ナイル河は毎歲一次必ず決溢して其水勢の猛
烈なる遠くシリヤ附近に逆潮し、時に往々淺沼と作り或は近海沙灘の
位置に變じて航海者の爲め最も危險の場所なりと謂はしむ、抑々ナイ
ル河は英佛海軍の古戰場として又佛土陸軍の古戰場として其名最も著
しきは夙に世人の知る所なり、余や半宵望遠鏡を手にして甲板に立て
ば渺茫たる沙原月黒く風死し、滿眼の風光暗澹として慽又絶を極む頭
を回せば西曆一千七百九十八年八月一日、秋風颯として海上を渡りフ
ーカー灣内暮色蒼然として黄昏ならんとするの時、英佛両國の艦隊

が龍驤虎躍、渦巻く怒濤と掀飜して砲烟漠々天に漲り、砲聲轟々地に震ひて爰に一大修羅の巷と現出せしが、大厦の將に覆らんとする豈夫れ能く一木の支ふる所ならんや、佛國の海軍に其人ありと知られたる稀世の英傑司令長官ブールスも、此日の戰利あらずして憐れ船を枕にナイル河畔底の藻屑と消へ行きしより、流石拔山倒海の英雄ボナパルトも蛟龍雲を失ひて忽ち池中の物となり、天涯万里の埃及丙地に封鎖せられ、孤城落日垓下皆四面楚歌の聲となり、是より英の勢力旭の如く昇りしは洵に是非もなき次第と謂ふべし、余は今此古戰場を目擊して千万無量の感なくんばあらず、觀よ秋風骨を埋む城山の月は如何に英雄の末路を照して懷古の情を吹くに非ずや、觀よ湊川百万の敵を物ともせず堤下一片の露と消え行きし楠公の末路は轉た鉄石の心を傷ましむるに非ずや、余は勝てるブールソンよりも寧ろ死せるブールスに向

つて同情の涙禁ずる能はざるなり、嗚呼ナイルの河アブーカーの水は今も尚は昔に變らねども、海傑英將逝て跡なく、毅魄英魂今將た何れの處に徉ふぞ、河は答へず水は語らず、濁波澎湃として朧月雲を排そるの處更に一段の凄絶を極む、一念茲に推到すれば誰か亦俯仰今昔の感なけんや、斯て地中海の航海も波濤極めて穩に同月九日順風に帆を揚げて瀛力と助く、シヽリー、マルタの間を航すれば水天髣髴の中遙に雲煙濛々として天に漲るは是れぞ世界に其名も高きエトナの火山なり、進んで北緯三十五度五十分東經十二度の處に至れば左舷近くバンテラリア島を望む、島端巍然として一個の燈臺あり、燭光遠く海上を照して白晝の如し、サーヂニヤの海岸に沿ふて航路を西南に轉ずれば右舷微にコルシカ島を望む、夫の佛蘭西皇帝の位に昇りて威權赫々歐洲を傾けしボナパルトは眞に是れコルシカの一島民なりき、人生の窮

ナイル河口の古跡を望んで英雄の末路を吊ふ

達浮沈豫め測り知るべからずとは謂へ、抑々渠は地中海の一嶋に生れ、て亞非利加の孤島に終へぬ、島に出でゝ島に還る寧ろ人生の常道を得たるものと謂ふべき歟、夫より航路を一直線に取りて同月十二日午後

マルセーユ港に到着しぬ

●マルセーユ港の景並其海運業

マルセーユは佛國の東南端にありて我小樽港と緯度を同ふし、現時の人口四十万三千七百四十九人を有そる佛國第一の開港場なり、東は里昂灣に面し、南は煙波千里の地中海を控へ、港内水深く大小二個の島嶼ありて樹木鬱蒼幽邃閑雅の趣掬すべし、而して瀛船の此間を過ぐるときは山上山下の全景歷々として寸眸に鍾り、滿眼の風光人をして轉

た故山の山水を追想せしむるものあり、茲と過ぎ進むと凡そ五六丁にして左舷に又た一個の青巒を望むべし、是れぞ即ちマルセーユ市街の外壁を形作る山にして深碧汪洋藍を染めて斷岸を洗ひ綠水青山を涯りて氣甚だ嵩高なるを覺ゆ、此日余等の到りし時は夕陽西に舂きて暮色蒼然海上を鎖し到底船渠に入るの望みなきを以て一先づ茲處に投錨し明日拂曉入渠の事に決す、甲板に立て市街を眺むれば白堊壯樓巍然として天と磨し、碧瓦宏閣燦然として雲を凌ぐ處、万街の燈光波に映ずれば幾万の流星水に碎け、細波溶々として玉を捲けば微風徐に舷頭を叩きて戞然聲あり、白晝を欺く電燈は才子佳人の往來を照し、人馬絡繹として雜沓華奢の趣手に取る如く見もれど、如何せん身は蓬窓の裡水を隔てゝ渡るとなり難く、空しく夜景を夢に收めて眠に就きぬ、翌朝旭輝滄溟を破て東天紅を流すの時徐に錨を拔て船渠に進めば左右各

々波堤を築きて海中に突出し、就中右舷の堤は高大長廣にして總てセメントを以て疊み一見胸壁の如く亦た万里の長城に似たり、船内水底凡そ廿五呎、碧潭湖水の如く幾百隻の濾船前後左右に繋留して帆檣林立し、社旗風に靡き國旗天に飜り、其壯觀名狀そべからず、渠側幾十の水壓起重器を備へて荷物の揚卸を便にし、両岸一帶の倉庫を設けて鐵道之に通じ、其規摸の宏大にして整頓せる實に龍動に比し敢て一歩を讓らざるなり、今其地理と高知附近に譬へんに吸江を地中海とすれば鏡川及び松ヶ端一面は悉く船渠にして新田及び新地を両岸の坡堤と見れば敢て大差なからん歟、況んや市街の廣狹規摸の大小ころあれ四圍の風光は轉た我故山に髣髴たるものあるに於てをや。

※　※　※

※　※　※

佛國政府が近來海事上の發達に意を注ぎ、航路の擴張に港灣の修築に年々莫大の費用を投じて益々之が隆盛と企圖しつゝあるは夙に世人の知れる所なるが、夫の伊太利のゼノア及び西班牙のバーセロナが貿易上地中海の要地として漸次其繁華を吸收せんとするの勢あるより、佛國政府は之に對し其競爭に打勝んが爲め、一昨年六月八日一千三百万法（我四百九十四万圓）を支出してマルセーユ港を築港せり、而して其規摸を擴張して港内の改良を謀りし結果は地中海第一等の港となるに至れり、加之茲に又最も世人の注意を惹起したるはマルセーユとローン河と連絡する運河の開鑿に在りとす、其計畫に依れば馬耳塞船渠の北端と起點とし海岸五六哩の間を切斷し、夫より二三の地方を迂回して、アールス運河に通じ、更にローン河に通ずるものにして其長三十四哩、内十七哩は地中隧道となし、馬耳塞ポートデヴー間を十哩其

マルセーユ港の景並其海運業

他を六呎半となす考案なり、而して該運河完成の暁はマルセーユ里昂間を短縮して水路二百五十哩(鐵道二二五哩)となし、百噸以下の小蒸汽船は何時にても、交通自由たるべく、更に三百噸以下の船舶を用ひてサラ子運河を經過しナンシー及び巴理等の各地に到るべしと謂ふ、右はエムチヤールスロー氏の考案にして昨年四月佛國工部大臣は其會議に於て共和の利益なるは國家的事業となし向ふ十ケ年の見込を以て三百二十万磅(我三千二百圓)を支出する旨を決定したるは、遠からずして此一大工事を完成するに到るべし。

此地に就て記すべき事柄多きが内に、余輩の威覺を最も刺激したるものは海運業の發達にありとす、觀よ孛佛の大激戰風雲暗澹として万馬騰躑し、セイン河畔鮮血流れて艸を染め、巴理城外屍積で山となし、劍折れ力尽き國辱千秋の恨を呑で城下の盟をなせしは僅に二十五年の

前なりき、然るに其大敗より未だ十年ならずして、瘡痍を癒し國弊を療治し、再び崛起して歐洲の一等國となれり、畢竟するに是れ露帝亞歷山第二世の保護扶掖與つて大に力あるは勿論なりと云へども、抑佛國國民有爲活潑愛國の赤誠に富み、工業に農業に海運業に全力を奮て熱注せし結果たらずんばあらず、而して近日強露と相結び相携へて國家堂々天下を風靡し、一擧して會稽の恥を雪がんとそるの意切なるは夙に世人の知る所なり

余輩窃かに佛國の海運業に關する方針を觀るに、二個の大目的存するを認む、何を以て之を謂ふ、曰く(第一)千八百六十一年の頃は補助金を下附して亞米利加東印度及び東洋諸國に航路を開き、爾來地中海航權を握るに到りしも、孛佛の戰爭は大頓挫を來たして是れより航權地に委し、又昔日の觀を留めざるに到りぬ、於是佛國政府は再び舊時の

イルセーユ港の景並其海運業

盛觀に復し海上貿易の利を營むと同時に、自家防禦の墻壁として益々保護政策の方嚮と持し之を奬勵すると(第二)英國が世界海上の王と成て造船業天下と壓倒し、堅牢廉價の滊船を作りて佛國の船主に供給するより、自已の工業毫も發達せざる而已ならず、却て衰頽せんとするより、茲に造船の業を奬勵して英の工業に拮抗せんとすると、及び獨逸の航運界を凌駕せんとするの野心あること、以上二個の目的は佛國政府をして一千八百八十一年に於ける造船及航海奬勵法案となり、引續き十ヶ年間之を施行せしが、思はしき效果を見ざるより、同九十三年一月三十日の法律を以て從來規定の部分に改正を加へ、更に向ふ十ヶ年間施行そととなりぬ、試に今之と摘擧すれば實に左の如し

航海奬勵金　は佛國製造の船舶のみ支給し外國建造の船舶には一切支給せず而して此奬勵金は遠洋航海(南は北緯三十度以外、西は巴理子午線の經十五度以外北は同七十二度以外東は同上四十四度以外)國際沿岸航海(遠洋航海に定めたる限界内の航海を云ふ)但佛蘭西諸港(アルゼリヤ其他の港と含む)と外國諸港との間或は外國諸港間に起りたるもの沿岸航海(佛蘭西諸港と佛蘭西及アルゼリヤ諸港間の尋常航海を云ふ)の三航路に從事する佛蘭西製造の船舶のみ限り(遊船及政府より補助金を受くる航路の滊船は之を除く)左の割合と以て之と支給す

滊船(總噸數に付き千哩毎に、一法十參(我四十九錢)の割但船体木造なるときは毎年一噸に付六參鉄及銅なるときは同四參を減ず

帆船(總噸數に付き千哩毎に一法七十參(我六十五錢)の割但船体木造なるときは毎年八參鉄及銅なるときは同六參を減ず

造船奬勵金　は佛蘭西製造の船舶のみ限り外國製造の船舶には一切支給せず、其規定左の如し。

鉄或は鋼造の滊船及帆(毎一噸)　六十五法(我二十四圓七十錢)

マルセーユ港の景並其海運業

百五十噸以上の木造船同上　四十法（十五圓二十錢）
百五十噸以下の木造船同上　三十法（十一圓四十錢）
機械（毎一日基）　十五法（五圓七十錢）
瀝鐵の据替同上　十五法（五圓七十錢）

海軍省の認可したる殊別の設計に依り準備せる瀝船に對しては總て其奬勵金の二割五分を增給せると知るべし但政府は戰時に於て之を徵用するを得而して佛國が此奬勵に對し幾千の金額を支出せるやと謂ふに千八百八十八年に於ては九百萬法同九十三年及び四年に於ては各々千五十萬法を支出せりと云ふ（一法）は我三十錢

※　※　※　※

此の如く佛國政府は夙に莫大の金額を投じて造船及び航海の發達と奬勵したり、加之信號臺の如き沿岸到る處として觀ざるはなく、太洋に

百二ヶ所地中海に三十二ヶ所を有し、其他暴風標一五七（毎二十四哩一基の割）燈臺四四八（毎八哩一基の割）水難救助一四七（海岸を五區に別つ）を設くる等總て海運上の發達に關し保護奬勵の途到らざる所なし、殊に一昨年を以て改正したる航海奬勵法の如きは實に百尺竿頭一歩を進めたるものと謂はざるべからず、觀よ昨年は瀝船九隻帆船十八隻軍艦七隻合計三十四隻此噸數九萬九百二十二噸を製造したるに非ずや、而して本年七月一日より明年六月三十日に至る「ロイド」會社登簿の百噸以上の船舶（「ハゼルスアニュアル」に依る製造中のものを含む）にして目下佛國が所有そるものは瀝船五八五隻此噸數九十三萬七百八十五噸帆船五七隻此噸數十九萬八千七百九十噸合計千五百十七隻此噸數百十萬九千五百七十五噸なりとす。之を我國に比較する時は昨年我國に於ては瀝船三隻軍艦二隻合計五隻此噸數五千九百六十噸を製造せ

マルセーユ港の最も其海運業

り而して更に之を百噸以上の船舶に比較せんに明年六月三十日迄の分を込め我國の滊船は三七三隻此噸數三十三萬四千五百九十二噸帆船七九隻此噸數二万九百三噸合計四百五十五隻此噸數三十五万五千四百九十五噸なりとす。

由是觀之我國は佛國に及ばさると滊船の數に於て二百十二隻、其噸數に於て五十九万六千百九十三噸、帆船の數に於て四百九十三隻、其噸數に於て十七万七千八百八十七噸、合計七百二隻此噸數七十七万四千八十噸なるに非ずや、航運界の第四等國たる佛國に比し尚は且つ然り況や英米獨の如きに於てをや、我國航海業の前途亦た悠遠なりと謂ふべし

現今佛國が世界の航運界に馳聘し如何なる航路を有するやと謂ふに、歐亞の間に佛國政府の開始せる航路は八線路ありて「メサヂリー、コリ

チーム」會社是に當り、米國に向ては九線路ありて「トランス、アトラソ、チック」會社及び「メサヂリー、マリチーム」會社之に當り、濠洲に向ては二線路ありて「レフン子ー」會社等之に當る、以上は何れも佛國政府の保護命令する定期郵便線路にして其他國內沿岸近海航路の如きは一ノ枚舉するに遑あらず之が爲め佛國政府が支出する金額は毎年凡ろ千五十六七万圓と下らざるべしと謂ふ、以て佛國政府が如何に海運を保護奬勵するかを知るべし、故に佛國の郵船は其噸數及船數に於ては一歩を英獨の滊船に讓るも、船体の堅牢室內の美麗速力の輕快なるに到ては寧ろ英獨兩國滊船に凌駕せんとするの勢あるは疑ふべからざる事實なりとす、吁佛國が世界の海軍力に於て第二位を占め海運力に於て第四位を占め近來一躍して獨逸に駕せんとするは寧ろ當然の事のみ、何ぞ驚くに足らんや、觀よ世界第一の海軍は英國にして其噸數百

四十萬噸、第二は佛國にして其噸數六十五万噸、第三は露國にして其噸數三十五万噸、第四は伊太利にして二十九万八千噸、第五は獨逸にして二十六万噸、第六は北米合衆國にして二十二万噸、第七は西班牙にして十四万噸なり、而して我國は墺地利土耳其等の諸國と經て漸く其第十等に位し（目下製造中の八島富士及び其他の巡洋艦報知艦と加へて）其噸數漸く十二万噸内外に過ぎず、余は海外に於て常に各國の軍艦が威勢堂々怒濤を蹴破り雄風凛々大鯨を叱咤しつゝあるを觀る毎に帝國海軍の現況に推到せずんばあらず、觀よ佛國海軍の歲費は一億五千万圓、陸軍の歲費は二億四千万圓合計三億九千万圓にして之を我國の海陸軍の歲費二千八百九十六万圓に比すれば其差果して如何、勿論其國勢地形に依りて絶大なる海陸軍を養成せざるべからざるは論と俟たずと雖も、之を概括すれば國家の貧富財力の有無は假令其必要を

認むるも之が擴張を計さゝるは佛國が世界の一等國として國富み兵強きは今更余輩の言と俟たざる所なり、現に佛國一昨年の貿易は輸入一億四千二百二磅輸出一億二千三百十二万四千磅にして之を我同年の輸入二千二十七万九千五百磅輸出千八百九十万磅に比すれば、我の佛國に及ばざると輸出に於て十萬四千二百二十四万圓合計二十三万千五百八十九万圓の巨額なるに非ずや、人は常に謂ふ我れは東洋の英國なりと、噫豈利典帝國は其素養深く且つ遠矣、僅に地理的の類似を觀て一躍五洲に横行する英國たらんとそ、是れ固より文人机上の空論而已、理想而已、空中樓閣的の希望たる而已、痴人の夢たる而已、嗚呼何れの日か眞に能く東洋の英國たる實權を得て世界に雄飛するものぞ。

※　※　※　※

抑「マルセーユ」か西は「バーセルーナ」を壓し東は「ゼノア」を凌ぎ地中海第一の要港として非常の繁盛を極むるは、佛國政府の保護誘掖に依るは勿論なりと云ども、抑亦天然の地勢地中海の中央に位し通商貿易の原理に於て其優勢と占むるも確に其一因として數へざるべからず、況や港を築き波堤を作り船渠を穿ち運河を開鑿する等總て海事上の要素完備せるに於てをや、天然の優勝に加ふるに人工の妙と以てす是れマルセーユが榮へざらんとするも得べからざる所なり、觀よ昨年我國より佛國へ向け輸出したる物品は其價格二千二百万六千三百八十六圓にして一昨年に比し一割二分九厘を増せり、而亦列國より輸入したる物品の價額は五百十八万百三十四圓にして一昨年に比し一割九分一厘を増せり、其輸入に於ては第三位と占むるに過ぎざるも輸出に到ては英を想し獨を凌ぎ世界第一の得意先なりと謂はざるべからず、況や年

々歲々其額を増加して兩國貿易の前途甚だ多望なるの今日に於てをや而是等の貨物は重にマルセーユを經て各地に散ずるものなるが故に此地が各國貨物の集散に依て非常利益を得つゝあるは是亦疑ふべからざる事實なり、然るに我國人にして一人の茲に商業を營むものなきは如何にも殘念千万の次第にあらずや

此地亦六個の乾渠及浮棧橋ありて就中第一號船渠最も壯大を極む、長五九五呎幅八三呎半深二十五呎にして今を去ること八年前即西曆一千八百八十八年の建築にして重に各國郵船の入渠修繕する所なり、又「グランドボテル」と稱する旅舘ありて市中壯大なるものなり、茲處に行けば一人の日本人ありて万事の周旋をなす、市街は路濶くして平坦なると砥の如し、鐵道馬車及蒸氣鐵道馬車等ありて東西南北に馳せ違ひ家屋左右に櫛比して高樓壯閣雲を摩し人馬絡繹として肩摩轂擊の狀殆

マルセーユ港の景並其海運業

も名狀すべからず、亦市中自轉車を驅りて燁々たる車聲絕もる間なく就中是等の自轉乘に多く妙齡の婦女子を見掛けたるは聊か意外の感きにしもあらざりし、聞く所に依れば目下此地にて遊戲の爲め使用する自轉車の數は六万五千輛内外なりと謂ふ乍併商業の爲めに使用する自轉車には課稅せざる規定なきを以て實際は以上の數よりも多かるべく亦盛なりと謂ふべし、且亦女子にして往々蓄髯せるものと見掛しときには一驚を喫せり、大概三十以上の婦人に多く是れは總て男姓の女子とても評すべき乎

流石に世界流行の泉は佛蘭西に湧くと云へる程ありて店内種々の贅澤品奢侈燦爛として山をなし金銀彫刻の類炳然として人目を射るには何人も一驚を喫そるとなるべし、一個の花甁と作るにさへ八九年を費して其價何万圓と云ふが如きは如何に佛人が奢侈を極むるかと知るべし

且亦佛國は美人の特産地を以て名高き國柄なれば流石に下女召使に到る迄何となく垢抜して妙麗花の如く玉肌雪を欺く人の視線を惹くもの少からず、況や深窓の佳人上流の淑女に於てをや夫の田舍紳士の佛國美人の笑に魂魄の氣を感じて一擲万金を惜まざるは寧ろ怪くに足らざるなり。此地亦公娼ありて市内一の花街を設け繁華雜沓の狀恰も我吉原に似たりと謂へり、其他病院官衙學校寺院製造所造船所等ありて何れも壯大盛觀と極むれど一々記述するは冗長に渉るを以て總て之を省略す、兎に角にも此地が佛國屈指の市街として巴理に次ぎ里昂と凌ぎ年々其富を增加しつゝあるは決して疑うべからず、特に其位置歐洲の中心に位するより即東に獨逸東南に瑞西、南に以太利及西班牙、北に和蘭及白耳義、西北には一葦帶水を隔て英國を控へ鐵路四通八達して交通自在なるより我國人士にして大陸に到るの人は大概「マルセーユ」に

マルセーユ港の景並其海運業

上陸するを常とす、故に余が今旅客に向て一片の注意を促さんとするは稅關の事なり

此地の稅關は頗る嚴重にして大陸中殆ど其比を見ざる程なれば諸般の事頗る煩雜を極め其面倒臭には何人も殆ど閉口することなるべし、更に手荷物の如きは多量を持ち行かざるを良とす、若し土產物にする考にて日本の骨董品抔を多量に持ち行かば啻に高價の稅金を徵收せらるゝ而已ならず、其手續甚だ面倒なればなり就中煙艸、絹物、マッチ等は其最も嚴重なるものなれば豫め用心するは旅客に執りて最も肝要の事ならん、併し稅關の官吏腐敗し賄賂公行するより其邊の心懸けある人なれば別段大した面倒もなからん乎兎にも角にも初旅の人が多量の手荷物を携帶するは万事に付て不便と知るべし

佛國劇場に遊んで芝居を見る

彼等は重大なる哨兵の職を忘れて夢境に遊びぬ、然るに此時覆面黑衣の一士官遙に山上より全軍の動靜を窺ひ哨兵のあらざるを覩て、態々山を降り渠が熟睡せる体を眺めて一刀兩斷秋水渠が首を臨むと思ひの外傍に落しありし銃劍を執て之を肩にし自が哨兵の役と勤めぬ（此時滿場拍手）斯て一時となり二時となり三時となれど渠は未だ醒めず已にして曉霜肌に染む頃ひ漸く其眠よく覺めぬ、覺むると共に銃劍の紛失せるに心付き驚て跳ね起くれば何ぞ圖らんや佛蘭西軍の大總督奈破命ボナパルドが銃を肩にして立つあらんとは、彼れは驚けり、殆ど氣絕せん計りに驚けり、彼れは泣けり（此時滿場寂として聲なし）稍暫らくの間一種の感情に刺激せられて物とも云ふ能はざりしが、忽にして

佛國劇場に遊んで芝居を觀る

熱き涙をパラ〳〵流し奈翁の足下に膝まづきて双手を合せて俯し拜しぬ（此の時觀客涙を欷るもの多し）此時奈翁は少も怒る樣子なく靜に彼を諭して曰へる樣『嗚呼汝覺めたる乎、汝覺めたる乎、汝の睡眠理なきに非らず、去れど去れど目下一分の怠慢は全軍の勝敗に關す、今日吾幸に汝に代て汝の職と全ふす、他日再び此轍を踏む勿れ、汝の銃劍茲に在り』と謂ひ終て靜に劍を渠に渡し悠々として後を見ず奥に入れり、此瞬間は滿場寂として水を蒔きたるが如く觀客何れも涙に呉れぬばかりなりき、余亦覺へず知らず數行の暗涙衣襟を沾したりき、嗚呼幾萬の軍勢が鎧を枕に艸を蓐に滿營寂として音なきの處、獨り山上に立て全軍の動靜を窺ひ銃劍を肩にし哨兵の職を執る如きことは如何に渠が用意の厚きを觀るとよ、其眠よく覺るを得て靜に後日に戒るが如きは如何に渠が兵士を愛そるの深きを知るとよ、面のあたり此英風偉

采を仰ぐ者誰か亦英雄の大度を感慨して馬上死を期せざるものぞ、宜なり奈翁が兵士の譽望を博して鉄蹄縦横佛蘭西軍の向所歐洲の山河を震動したるを、其他花の如き宮女勇しげなる武官が金光燦爛たる殿内に舞踏するが如き、或は奈翁「ジョセフキン」の愛情となり或は以太利遠征の爲め開戰を布告して愛暫の別を惜む「ジョセッキン」の歎の如きは坐に人をして落涙の情に堪へざらしめたり吁彼女は佛蘭西第一の美人宮に容顔の美麗なる而已ならず郎に仕へて貞節能く松柏の操を守りて其行と始終したるは眞に是れ天下婦道の鏡となるべし、左れど憐れなる哉春夜の夢短く秋は早晩しか彼女の上に落ち來り万斛の涙を流して郎に別れるの不幸に到りぬ、而て晩年奈翁の末路か憐れなると同時に彼女の終りも亦洵に慘憺たるもの多きは是れや所謂美人薄命にして英雄數奇とや謂はん、余輩今宵始て此戲を目撃し英雄節婦の末路に同

佛國劇場に遊んで芝居を觀る

情の涙を催ふと最と深し、斯て芝居は尚未だ果てざるも再び話曲に移りしを以て先に得たる一枚の切符を示して一杯の麥酒に渇を沾し陶然として仮路に就きぬ、時に午後十時を過ぎると二十五分なりき

道徳の廢頽及宗教の腐敗

「マルセーユ」の港が地中海第一の優勢を占め船渠深く市街潤く道路淨く海運業に製造業に物質的の進歩非常の盛觀を呈するは余輩の大に驚嘆する所なるが、之と同時に飜て其裏面を觀察すれば人間に難しとする無形の道徳地を拂ひ痛く風紀の廢頽せるには殆ど再驚の外なきなり余輩は先に「ポートセッド」に於て風俗の廢頽し倫理の腐敗せるを觀慨嘆の余聊見聞一二を錄して讀者諸君の請覽を瀆せしが今にして其酷な

りしを覺りぬ、何となれば彼れは熱帶未開の胡地人文の發達未だ其歩と進めず隨て風紀の廢頽するも多少恕すべき點なきにしも非らず、然るに佛蘭西の如きは堂々たる世界の雄邦にして夙に文明開化を以て誇る歐洲の先進國なり、而「マルセーユ」に於て道徳衰へ風俗廢頽し貴顯紳士貴女令嬢の風儀殆ど聞くに忍びざるものあるは實に意外千万の次第なりと謂はざるべからず

曾て佛國女子の行狀甚だ高潔ならずとは耳にしたるも所謂百聞は一見に如かず、實際其の狀態を目撃するに及て余輩の一驚三嘆する所以のもの豈夫れ所以なからんや、豈夫れ所以なからんや、請ふ余輩をして少しく語る所あらしめよ、

抑佛國民が道徳倫理の点に於て著しく衰頽せる所以のものは種々の原

因あるべしと云へども、余の觀る所を以てすれば宗教の堕落は確に人心腐敗の一因たると疑はざるなり、觀よ全國と通じて百分の八十は悉く舊教信者なるも如何せん佛國今日の宗教は心靈界を感化して人心を善道に導くの力と有せず、否却て風紀廢頽の導火線となり、倫理衰亡の媒介物となりつゝありと謂ふ、誰か亦疑と容れんや、佛國新聞紙の第三「ページ」を讀むの人は必ず觀るべし夫の道德倫理の木鐸を以て任ずる宣教師が豪家の夫人に通じ深窓の佳人を辱め已を欺き社會と欺きつゝあるの事實を、如斯して靈界の視線を高め人心を感化し世道を稗益せんとす豈夫れ得べけんや、佛國宗教の腐敗推して知るべきに非ずや、世人は必ず想ふべし歐洲基督教民は心靈界の素養深く一夫一婦の制度を守りて家庭和樂し一週一日必ず教會に行き邪念を排ひ情慾を制し依て以て個人的に國家的に道德堅固の者ならんと然り渠等は生れな

がらにして基督教民たるなり、彼等の或者は純正高潔其行を始終するものならん、彼等の或者は宗教上の眞理を發揮して人心を感化するのあらん、彼等の或者は必ず靈界の支配者となつて蠻境瘴土に傳道するもののあらん、彼等の或者は光明界を理想して道德堅固のものあらん否余輩は三千八百万の蒼生中必ず如斯人物あるを信じて疑はざるものなり、然れども如何せん是等は例外而已少數而已、沿々たる國民の多數は理想界の觀念を離れて動物的情慾の奴隷と化し了りたるを觀よ彼等の會堂に赴くは精神上の修養をなすが爲めに非ずして情夫情婦を求めんが爲めなり、觀よ彼等の一週一日教會に赴くは聖母の像を拜せんが爲めに非ずして美人の貌を拜せんが爲めに非らずして生活糊口の爲め而已、觀よ彼等が蠻境瘴土に布教するは神の福音を傳ふるが爲めに非ずして「フリーフヒンガー」の徒あるに於已、況んや宗教と度外視する幾多の

道德の頽廢及宗教の腐敗

てをや、夫れ不德義不品行の人を容赦せざるは道德上の制裁なり、然るに佛國の社會が輕躁浮薄の戀愛小說を愛讀し、或は男女秘密の交情を摘發して之を上梓するが如き、或は避姙術の書籍と公賣して妙齡の男女之と研究するが如き、一に道德の衰頽を證するものに非らずして何ぞや花を催すの雨は花を散すの雨たると知らば誰か佛國現時の宗教が却て不德言行と增長せしむる一の導火線となりつゝあるを疑ふものぞ。

由來佛人は高潔貞操の氣象に乏し、觀よ、佛國滿天下の望を負ひたる稀世の政治家「ガンベッタ」は嬋妍たる女子一發の銃瘡より功業空しく九泉に流れ近くは豪氣一世と傾けたる「ブランゼー」將軍も一情婦の爲めに墓上今尙一大汚点を存するに非らずや、或は六十才の男子が十才の少女と强姦し、或は男女の情盟を締するに公然新聞紙上に弘告するが

如き、或は鐵道貨物の中に私生の乳兒を發見するが如き、一々枚擧に遑あらず、若し夫れ一夜街頭に立て靜に偵察せん乎、花の如き紳士淑女も忽にして標郎魔婦の變化たるを知るべく壯儼華麗の市街も忽にして妖氣人を襲ふ一の遊廓たるを發見せん、故に我國人士にして往々其妖氣の感染する所となり前途と誤るもの少からず、觀よ某氏の如きは青年有爲の士官として夙に留學と命せられたるも、今や佛國一旅館の主人となつて再び故國の山水を踏む能はざるに非らずや、又た某氏の如きは幾万の學資を蕩尽して色界の迷津に溺れ僅かに妖婦の見繼に依て辛じて生活したるに非らずや、其他種々の怪聞余輩の耳朶を掠むるも中傷の嫌なき能はざるを以て一々茲に記述する能はず、兎にも角に佛國が物質的文明に於ては長足の進歩となせど、倫理道德の上に於て著しく衰頽せるは確として疑ふべからず、蓋し上流社會の婦人にし

て情夫を持たざれば佳人と謂れず、上流社會の紳士にして情婦を持さ
れば才子と謂れず、故に男女各相競ふて情人情婦を求むるに忙しきは
佛國現時の狀態なりとぞ、上の好む所下之より甚しきはなし一國の中
心点たる上流社會の紳士淑女にして尚且つ然り、況や其中流及下等社
會に於てをや、言聊か極端に走るの嫌なきに非らずと云へども佛國人
士の狀態を穿ち得て中らずとも遠からずとせんや昔者「ホーラス、ジ
ウェナル」なる者羅馬全盛の時代に於て早くも國の源を痛論したると
わりき、余輩は佛國現時の狀況と見て直に其末路を推するものに非ら
ずと云へども「德は國家を濟い敗德は國家を喪ふ」てふ西哲の格言にし
て吾人を欺かずんば佛國の前途豈夫れ憂べきと少とせんや、聞く目下
佛國の識者は大に之を憂慮して夙に風俗矯正の策を講じつゝありと、
語と寄す我國駐錫の佛國宣敎師に卿等万里の波濤を超へて我國に來る

迄もなし、目下卿等の社會は道德腐敗して妖雲魔氣天を蔽ひ人をして
愁眉を顰せしむるものあるに非らずや、何ぞ速に去て自國の傳道に從
事し風紀矯正の任に當らざる、燈臺下暗しとは蓋卿等の謂ならん乎、
嗚呼窈窕たる蒲桃の資を抱て國家を累卵の危に救ひたる「ジャレダー
ク」孃は已に逝て跡なく、一管の筆に万丈の氣焰を吐て佛國幾千萬人
の運命を左右したる「マスー」今何處にかある、青苔古墳と鎖し滿目荒
涼の秋、一痕の殘月依稀として墓木を照らす時、知らず泉下百年の傑
士女丈夫同胞末路の狀に對し一片の俠淚と灑ぐや否。

佛國婦女子の行狀を論じて我姉妹に檄す

余輩は佛國に來て人心の墮落せるを觀たり道德の衰へたるを觀たり倫
理の廢れたると觀たり而宗敎の腐敗は確に其一因たるを見認め種々の

實例を擧げて之と證據立てぬ余輩は決して宗教を度外視するものに非ず否寧國家道德の先導者として社會倫理の鞭撻者として宗教の必要を說くものなり、然れども觀ずや澄渡る秋の月には浮雲の伴ひ花咲く春の櫻には夜半の嵐の吹き來るを。左れば宗教にも亦一種の弊害潛して嵐の爲めに雲の爲めに往々其光を失す羅馬と謂はず希臘と謂はず佛國現時の宗教之と證して餘あるに非らずや、然れども余は佛國人心の腐敗を以て其罪を悉く宗教に歸する能はず何となれば宗教の腐敗は宣教師の墮落に因るなり宣教師の墮落は佛國人民の罪なればなり何を以て之を謂ふ曰く何故渠等は惡奸不德の宣教師を許すや。何故に渠等は不正不潔の人を容るや是れを許し彼を容るは國社會の腐敗せる所以に非ずして何ぞや果然佛國社會の腐敗せる淵源那邊にかある、請佛國社會の腐敗は已に革命の當時に於て發生したるものなりと謂は

ざるべからず何となれば彼等は重斂苛稅惡虐の跡を滅さむとして却て慈悲道德倫理をも合せ亡したり觀よ今日佛國社會の組織が如何に卑猥なるかを夫の「コンセール」の如き「ダンシング」の如き若くは珈琲店の如き男女の密會と媒介し男女の卑行を奬勵する者と觀て大差なからん又た佛國の社會が歡迎する所の小說繪畫彫刻の如きも多少不實の罪を作るの一因たらずんばあらず。勿論東西百里其の情を異にすると以て是等の物を目し一概に風俗壞廢男女の情慾を惹誘するものなりと謂も聊か酷論の嫌なきにしも非らずと云へども夫の店頭に飾る裸像の如き若くは市街に聳ゆる裸像の如きは人情戀愛所謂爲永流の院本の如きはタトヒ美術の思想道義の觀念を以て之に臨むも其間豈に一點の誘惑潛むなけんや、觀よ其行は極て淸潔に其志は極て高尙なる靑春妙齡の男女と云へども時に觸れ折に當り「スカレットブック」の中にある珍談奇

語を探らんとするの情起るは寧ろ人間天賦の理性と觀るべきに非らずや然して此間に立て能く情念の發動を防ぎ清淨潔白の心意と維くものは只夫れ道德倫理の制裁あるが爲めなり。然るに現時佛國人民の智慮心性は是等行爲の善惡是非を判斷する点に於て大に欠くる所なくんばあらず、觀よ綠陰深く地塘閑なる處、二八の男女が近會低話するも人之を咎めざるに非らずや、絲竹管絃亮々たる演舞場内妙齡の男女が情話を締盟するも人之を怪まざるに非らずや「バイブル」片手に「マリヤ」の像前戀の奴となり浮き身を窶す少女あれども人之を問はざるに非らず情人婦情が相携へて逍遥するを觀れば多の人は之を羨み之と慕ふに非らずや是れが即佛國社會の道德が頗る卑近なる所以にして若夫れ自己の判斷を行爲に應用すると以て道德の原則となし社會に立つなり萬事と是非そるを以て倫理の意義とすれば正に知るべし佛國の社會が之

を咎めず之と怪まず之と問はず之を默し之を許す處のもの即道德倫理衰亡の一大原因なるを

且夫れ德は心に宿りて之を爲さざるはなせども國家は德を作るものに非らず語を換もれば國家は法律を以て道義を命ずべきものに非らず畢竟法律は人間の弱点と保護するに足らずして道德倫理の因て別るゝ所ろ只夫れ心の如何に在る而已故に男女の關係純潔となりて個人の道德高く個人の道德高まりて一國倫理榮え果して然らば道德の基は男女の間にありと謂ふも敢て不可なかるべし然るに佛國個人の道德彼の如く男女關係如斯とすれば一國と擧て風紀廢頽し世道人心の衰亡するに到る固より當然の理而已何ぞ深く怪むに足らんや、宜なり夫の上流社會の紳士淑女が女優に耽り情人に戲れ妾を携へ卑穢淫逸俗をなして動物的情慾の奴隷となり了んぬると名は

基督教國民として一婦一夫の制度の下に高潔清淨の生活を營むが如しと云へども何ぞ圖らん其裏面には一夫二婦の奇觀あらんとは、曾て日清戰爭の際佛人フランソアー、コッベーは我を評して心に蠻人たり技術に於て文明人たりと叫び尚は愛の教を受けずして殺人學を習ふ所の汝日本人よと絕叫したるとありき、然るに今や汝が國は道德亡びて倫理地を拂ふに非らずや是れとしも文明と云ひ開化と謂ふを得べき乎、嗚呼文明とは如何なるものを云ひ開化とは如何なるものを謂ふ乎ェマルソン曰はずや勤勉の人各々敗德の所業なくして生活し得るに至る迄社會は實に濛昧野蠻たると免れずと果して然らば佛國の如きは歐洲第一の野蠻國なりと謂ふも敢て其誣言に非らざるを信ず是れ余輩が佛國の眞相を暴露して我國人士の注意を煥起すると同時に聊か其所見を開陳せんと欲する所以なり

余輩固より文筆を執て世間に立つものに非らず故に高論卓說は余輩の期する所にあらず余輩は一介の書生固より弘く宇內の大勢に眼を注ぐものにあらず故に荒劍飄然一身を天下に許すサスウンと以て任ずるものに非ず余輩は今や海に航して航海の業を究めんとするものなり故に醜窟汚穴の中に潛り人間界の魔事と摘發するゾオラの亞流を希ふものに非らず然れども非と非とし是を是とし醜と醜とし穢と穢とする一片の稜骨に到ては敢て人後に立たざるを期するものなり故に一輪の飾るなく一枝の扛ぐるなく醜と穿ち因を說き果と示し人心をして恐怖止らさらしめんとする所謂懲惡の目的に出づる余輩の微志なり又々善を揚げ美を稱し人心をして欣慕措く能はさらしめんとするものは歡善の目的に伴ふべしとは更に眞理の明瞭を認む是れ余輩が歐洲の俗を調べ是を我人情習慣に照らし依て以て聊か其反省と請はんとする所以なり

佛國婦女子の行狀を論じて我姉妹に檄す

夫れ妙齡處女の時に於て其品行と愼み貞操と重じ南枝一輪の梅花其春信と誤つの如きは極めて稀に觀る所なりと云へども其嫁して人の妻たるに至れば打つて變つて品行修まらず身持全からず貞節婦德と破て往々聞くに忍びざる醜狀を流すに至る是即ち現時歐洲婦人の常態なりと顧て我國の風俗を觀れば悲哉隔墻の花を手折り連理の契を結ぶは我日本の悪風なりと謂はざるべからず父母の命を待たず穴隙を鑽りて相窺ふは由來東洋の弊習なりと謂はざるべからず蓋し彼等は自由結婚なるを以て男女の交際すること極めて多く万一未婚の日に於て穴隙を鑽りて相窺ふが如きことあれば他日離婚の原因として法廷上十分なる効力を有するより假令ひ情念燃もるが如きも決して不潔の契をなさゞるなり然るに我國の俗は大に之に異れり所謂干渉結婚なるを以て男女の結婚するは極て稀なるも其反動力は常に春風の吹くに任せて浮氣なる柳の

絮の飛び狂ひ西に東に浮艸の浮き名を流すは毎度余輩の實見する所にして洵に歎はしき次第と謂はざるべからず我國に於ては未婚の時よりも寧結婚の後を以て婦道の大節となすが如し余輩今俄に之が是非曲直を判斷する能はずと云へども其操を破り節と折るは共に是れ婦道の一大欠点として大に矯正せざるべからざるは今更論と竢たず

抑高操貞節に對し男女の両性が各々其分擔の責に任ずべきは天下の公理上正に然るべき筈なるも如何せん我國社會文明の幼稚なる男子の私德私行は所謂大功細瑾を顧みざるの例外として社會の制裁左迄嚴からず英雄色を好むの諺は殆んど一種の格言として世間に響けり故に其昔し東山妓を携ふるの豪遊は元より玉水新地は青柳橋畔美人の枕に千金を擲つも人觀て之と怪まざるに到れり然るに今や人文の發達と共に男女の關係は一國文野の反鏡となり一夫一婦の天法は次第々々に人間處